
EARTH

デベ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EARTH

【Nコード】

N1390I

【作者名】

デベ

【あらすじ】

世界をモチーフにしたオンラインゲーム「アース」を舞台に繰り広げる。ある男の子の冒険である。

序章：世界観の説明（前書き）

オンラインゲームがわからない方にはわかりにくいかもしれません。

序章：世界観の説明

アース

それは僕が現在プレイしているオンラインゲームの題名だ。このオンラインゲームは名前の通り地球全体がフィールドとなっている。小さな島々まで細かく作りこまれているのだから面白い。

『担当する地域ごとにスタッフを送り込んで作っています』

とは制作会社の社長の談だ。

たかだかオンラインゲームにそこまで……。と思わなくもなかったが突っ込んだら負けだろう。だがそういうだけあって作りこまれており、ゲーム内を通して小旅行に行っているような気分になれる。ゲーム内には飛行機というものが存在せず大陸の移動は船になる。天候まで設定されており嵐の日に船出すると十中八九沈没するというイベント付きだ。

そういう僕も始めたばかりの頃に沈没イベントをやってしまったている。船に乗って少し移動したと思ったら画面が暗転しムービーが始まった。

- - - - -

「船長！船が持ちません！！」

「やはり無理だったか……」

「船底に浸水！！」

「塞がせる！」

「無理です！手の空いている者がいません！！」

「乗客でもなんでも使え！！」

「船長！！」

「今度はなんだ!!」

「正面に、高波です!!!」

「なっ!!!」

「駄目です!!! 飲み込まれます!!!」

- - - - -

セリフはこんな感じだった。

情報サイトによるとキャラクターのパラメータ次第で渡りきれらしい。

ちなみに沈没イベントだけで数種類存在するらしい。僕が当たってしまった「高波」、他にも「渦潮」・「転覆」・「座礁」・「モンスター遭遇」などである。全部にそれ専用のムービーが入るとのことだ。

会社が会社なため、他にもイベントがあるんじゃないかと日々沈没を繰り返す酔狂な輩まで出る始末だ。

沈没イベントに会うとレベルは変わらないが、身につけていた防具以外の全ての道具を無くし、敵レベルの低いモンスターが出る浜辺にランダムで送りこまれる。

公式曰く、そのランダムイベントでしか行けない場所もあるのだそうだが、辿りつけた人はいないそうだ。
海を渡るだけでこれなのだ。

このゲームはやりこみ要素が高すぎである意味で魔境と化してしまっていた。

プレイヤー人口は全世界合わせて1億人ほどだろうか。

イベント数は会社側でも把握できていないんだとか……。

ハワイ諸島だけでイベントが200個近くあったそうで、会社では数えるのを放棄したらしい。

ジョブ数は日本国内だけで3ヶ所近くあるのでこれも数えていない

のだそうだ。その中にサラリーマンを見つけた時には数秒間停止してしまった。完全に絶句したのは魚だった……。

言語文化も様々なところから仕入れてあるが、特定のアイテムが翻訳機となっておりそのアイテムを入手すれば自動で翻訳してくれる。有名所というか英語に関しては特定の店で買うことができる。英語があればそれほど困らないのだが、特殊な言語はイベントを通して手に入れなければならない。

僕はめんどくさそうなのでやってないが……。

このゲームはステータスや装備品の自由度が高い。

個人のステータスでは「腕力・頭脳・魔力・体力・運氣・回避・命中・素早さ」がある。モンスターごとにステータスポイントを貰え、各ステータス5000くらいまで割り振れる。

最初のジョブ設定でモンスターを選ぶこともでき、モンスター側を選ぶと海を渡ることが出来なくなる代わりに、森の中での縄張り争いや上下関係を決めるゲームになるそうだ。

他にもいろいろあるのだが、全て説明すると日が暮れるので割愛させてもらう。

アースの雰囲気はだいたいわかってもらえただろうか。

これが現在僕がハマっているゲームであり、この後に起こる出来事の舞台である。

日常

僕の名前は佐藤晃さとうあかり県立の普通科に通う高校二年生で、学校での成績は中の上、運動神経は中の下、ルックスは並の至って平凡な生徒だ。今は夏休みが終わり一月ぶりの学校へ向かっている。

「おい。あきちゃーん」

「待てよあきらー！」

背後から声をかけられ振り向く。

「わー。凄い顔だー」

「うおっ！どんだけ不景気な面してんだ！」

声をかけてきたこの二人の名前は河藤茜かとうあかねと河藤大助かとうだいすけの兄妹だ。学年は僕と同じ二年生で二卵性の双子だ。

「おはよう二人とも。朝から元気だね」

「あきちゃんが元気ないだけじゃないかなー？」

「あきらが死にそうなだけだと思うぜ……」

力のない笑みで答えると二人揃って突っ込んでくる。

この兄妹とは幼馴染というやつで、幼稚園からずっと同じ学校に通っている。兄の大助は勉強はいまいちだがスポーツ万能。妹の茜はスポーツは絶望的だが、勉強は通っている学校では常にトップ3にいる秀才だ。（僕らの通っている学校は上の下くらいだ）

「いやー、夏休み前に始めたオンラインゲームで夜更かししたんだ」
「あきちゃんは廃人だねー」

「あはは……。そうかな？」

「そうだろ。学校があるつてのに夜更かしするなんて……」

「時差の関係で友達が接続するの遅いからね。向こうに合わせるとどうしても寝不足になっちゃうんだよ。」

「ふーん。それって相手は女の子なのー？」

「性別は聞いてないからわからないよ。まあ聞いたところで本当かどうかかわらないけどね」

俗に言うネカマプレイというやつだ。

実際に会う訳ではないので、キャラクターを見ただけでは、現実の性別を見分けるのは不可能に近い。

オンラインゲームで何を期待しているのか、男性プレイヤーの中には言い寄って行く勘違いもいる。そういった勘違い君からレアアイテムやお金を譲ってもらう人も中にはいる。この行為は姫プレイとも呼ばれる。

まあお互いが楽しんでるならそんなことはどうでもいい。騙されているなら騙されるやつが悪いのだ。

「とりあえず今日が半日授業で助かったよ。始業式万歳だね」

「だな。授業なんてつまらんものが早く終わるのはいいことだ」

「全く二人ともそんなことばかり言つてー。成績落ちるぞー」

「妹よ。安心しろ」

大助がニヤリと笑って茜の肩を叩き、それは堂々と言い切った。

「俺はこれ以上下がない！！」

そう、大助の成績は学年最下位を記録しているのだ。

本当によく進学できたものだといつも思う。

「もー！そんなの堂々と言うことじゃないでしょー！」

「そうだよ大助。赤点ばかりで夏休みの半分くらい補習だったんでしょ？」

「いや、補習はめんどくさかったが部活に乱入してたから逆に楽しかったぜ？補習なかったら休みに学校なんぞ行こうとも思わないしな」

「確かに」

それについては激しく同意だ。禿同というやつだ。……いや、なんでもない。

用もないのにわざわざ学校に行きたい生徒はいないだろう。

「そうかなー？友達とあんまり会えなくて寂しかったよー」

「茜は勉強ができるからだろ。俺は生憎と出来がよくないんでな」

「まあまあ、大助は運動神経がいいじゃん。今でもいろんな部活連中に誘われてるんでしょ？」

「そりゃあ体を動かすのは好きだけだな。どれか一つっていうのは駄目なんだよな」

「私は運動できるのがうらやましいけどなー。体育で長距離走するといつも最後だもん」

相変わらず両極端な兄妹だった。二人合わされば非の打ちどころがないだろうに……。

「お、校門が見えてきたな。校門まで競争するか？」

「いやだよー。私どうせ最後だもん」

「大助の一人勝ちに決まってるから僕もパス」

「相変わらずノリの悪いやつらだぜ」

「この暑い中よく走ろうと思えるね。僕には理解できないよ」

「暑いからこそだろう。お前らはわかってないな」

そんな感じで他愛もない話をしながら校門を抜け教室まで行く。教室には3分の2程度のクラスメイトが集まっていた。適当に挨拶をしながら自分の席に荷物を置く。時間を見るとまだ始業式まで時間がある。

そうなるとお約束のように僕の席にいつものメンバーが集まる。

河藤兄妹・小泉真樹・それにこいずみまきはまのまゆゑに浜野衛だ。

「おはよう。相変わらず仲良く出勤ね」

「いよう！ 夏休みの宿題は終わってるかー？」

「二人ともおはよう。相変わらず元気そうだね」

「おう。夫婦揃って元気そうだな」

「おはよー。二人は仲良しさんだからねー」

「「誰が夫婦だ！！」」

二人が声を揃えて言った為に、クラス中から笑い声上がる。

「笑うな！」「笑うんじゃねえ！」

ここでも二人揃えて言ったものだからそこかしこから野次が飛んでいる。

「まったく！ その兄妹が余計なことを言うから！！」

小泉真樹はクラス委員長で文芸部に所属している。

真樹は茜と仲が良かったため、いつの間にかこの輪の中に入っていた。

「まったくだ。朝から疲れちゃったよ」

浜野衛はバスケット部員で2年生でありながらレギュラーに入っている。衛は大助をしつこく勧誘しているうちにこのメンバーに加わるようになった。

「あはは。新学期早々から災難だったね」

「晃。笑いごとじゃないぜ」

「本当よ」

「夫婦だから仕方ねえよ」

「仲良しなのはいいことだよー？」

「なあ、茜は本当にわかってるのか？」

「全くわかってない。兄である俺が保障しよう」

「その保障はできればないほうがよかったわ……」

「えー。わかってるよー」

「わかってないと思う」「いや、わかってねえ」「わかってないわよ」

「わかってないだろ」

「もー、あきちゃんまでそういうこと言うのー。」

休み前と同じような会話を繰り返していると、始業式の始まる時間になったようでクラスメイトたちがそろそろと移動を始めた。僕らも無駄話をしながら体育館に向かった。

オンラインゲーム・アース

「ただいまー」

友達と別れ家に帰ってきた。僕は帰宅部で、昨晩は夜更かししていたので学校が終了すると早々に帰宅した。

「ふう……。でも今から寝たら明日も寝不足状態だろうな……」

そう考えると今から寝るのはまずい気がする。今日は早めに寝る代わりに今からゲームしよう。宿題も出されていないことだし。僕はそう考えると部屋に向かった。

荷物を置き着替えをすませる。

PCを起動し、デスクトップにある「アース」をダブルクリックする。ウィンドウが開き起動中の文字が出る。数秒の間を置きオンラインゲーム「アース」が起動した。

「ユーザーIDとパスワード入力つと」

慣れた手つきでキーボードを打つ。次にキャラクター選択画面に移行。画面内には作成された自キャラがいる。僕のキャラはありきたりなところで魔法使いと剣士だった。あと数体作成可能だが、今はまだ作らなくていいだろう。

今の時間だと友達、というよりは相方が接続していないので魔法使いにする。魔法使いを選びクリックする。画面が暗転し、次に明るくなったときには画面には「アース」の世界が広がっていた。

「ダンジョン内でログアウトしたんだっけ……」

周囲を見るとそこはどうやら初級ダンジョンのようだった。目的は装備品を揃える為だったはずだ。

「アース」の世界では装備品はモンスター討伐後に手に入る素材を集め、特定のノンプレイヤーキャラクター（以下NPC）に持って行くと作成してもらええる。簡単に作れる装備品は行きやすい街にあるのだが、あるのはせいぜい初級防具だ。

中級になると陸・海問わず、秘境と呼ばれるもいい場所にある。しかも移動の魔法は存在しない（会社曰くよりリアルにするためだとか）ので中級装備すら作るのが大変なのだ。

自分のジョブの装備しか作れないため中級ですら破格の値段で取引されている現状だ。初心者には高すぎて手が出せない。

「アース」でもお金という概念はあり、リアルマネー（円・ドル・ユーロ等）その土地ごとに違うのだから堪らない。お金の両替をしてくれるようなNPCはおらず、主にその土地の港でお互いに必要な紙幣をプレイヤー同士で交換するのだ。

お金は回復アイテムや食糧、野営用のアイテムなどいろいろな物を揃えるのに使う。故にお金が必要になる各国の港や主要な道路では頻繁に露店が開かれている。

日本では現在の首都である東京付近が一番賑わっている。

アースではお金、というより食糧が重要で、旅の最中に食糧が切れ、そのまま放置するとそのうち餓死する。

死ぬとステータスがランダムで-1000され、一番近くの町や村に戻される。

最初のうちだと敵を倒しても10程度しかもらえないのでいつまで経っても強くない。しかも移動はもっぱら徒歩なので時間がかかる。

移動中に食糧を見つけることもあるが、茸などはリアルに名前が付いているので知らないで食べると毒キノコだったりする。草はどこ

でも取れるが雑草率がとても高い。山菜も取れるには取れるが確率は低い。

移動は移動で東京から名古屋までを陸路で行こうとするとおよそ3時間はかかってしまう。(ちなみに船だと30秒だ)

だからこそ内陸の秘境と言える場所に強い武器を作れるNPCが配置されているのだが……。

僕の操作している魔法使いはまだ始めたばかりなので装備は初期状態だ。初級のダンジョン(町や村の近くの森)でモンスターの素材を集めつつ食糧を確保している。

敵の一群を倒すごとにステータスポイントをもらいパラメータを上げていく。敵を倒すともらえるのはステータスポイント・稀に素材・極稀に食糧・それと経験値が手に入る。経験値は決まった量を稼ぐとスキルレベルがアップする。

スキルレベルは各キャラクターごとに100までと設定されている。スキルは最初から扱える基本スキルと、スキルレベルが上がると手に入るスキルポイントを振ることで派生魔法を覚えていく。

中にはお金を払ってスキル書を手に入れるものや、クエストをクリアすることで手に入るスキルもある。(基本的に最強技と呼べるものは、クエストクリアで買えるようになるスキル書を手に入れ、さらに覚えたスキルにスキルポイントを振らないと覚えられないようになっている)

スキルは基本的に技を出す時間が決まっているので、魔法使いにはスキルポイントが死活問題になってくる。

他にもあるが、そういった理由から僕は初級ダンジョンでしばらく狩ることにした。

しばらくモンスターを撃退していると、突然警告音が鳴り始めた。

(警告音が鳴るのはプレイヤーが操作しているモンスターが一定範

囲内に入ったことを示す)

プレイヤーが操作するモンスターは、基本的にNPCモンスターと違い思考力と強さがケタ違いになっている。そのためにこのような警告音が出て、初心者には逃げるように促すのだ。

僕の魔法使いはまだ装備もレベルも、プレイヤーモンスター（次よりPMと略す）に勝つことなどできないので、逃げの一手を選んだ。PMに負けた場合はNPCと違い食糧と素材を根こそぎ奪われてしまう。逆にPMを倒すと珍しい素材が手に入るので比較的頻繁に戦闘が行われている。（PMのレベルが高い程レア素材が出やすい）「アース」の世界にはBossと呼べる者がいない代わりにPMシステムを採用していた。（PMのレベルは普通のキャラクターとはレベルのつけ方が違うがここでは割愛）

今更になるがオンラインゲーム「アース」での目的は、未開拓地の開発というものだ。

これだけだと何万人もいれすぐに終わるように感じるかもしれないが、そうならないためにPMシステムあるのだ。

PM側では自キャラを同じくモンスターを倒すことで強化、そしてパラメータを上げる。さらにPM側は個人だけでなく群れを強化することができる（もちろんスキルもある）。

群れを維持するのに山の中にある食糧を確保したり、群れのメンバーを補充&強化することもできる。

さらに村を破壊することもでき、大きい村を壊すほどより多くの経験値と食糧を手に入れることができるようになっていく。

以上のことからわかるように、大陸の奥にあるような村は早々に壊され食糧の確保に当てられる。

破壊された村で手に入る武器・防具はPMを駆逐し、村を再建させないと手に入らない。そのため秘境で手に入る武器・防具の値段はとても高いのだ。

人が操作しているキャラは倒した後、手に入る経験値やステータスポイント、食糧が大幅に補正を受けて大きくなる。

あまりどちらかに偏るとゲームマスター（以下GM）が降臨し、負けている方に加勢するという噂もある。

それでも月に一回バランス調整のために元の状態に復元している。

そんな訳でモンスター側も人側も隙あらばプレイヤーキル（略PK）をしようとしているのだ。

基本的にレベルが高かろうがどこにでも行くことが可能な為、今のようにレベルが低いダンジョンに人・モンスター両方のプレイヤーが現れる可能性がある。

このPK数はカウントされていてこれが多いと人・モンスター側の両陣営から賞金首扱いされる。

僕は一番近い街に舞い戻っていた。

そこまで深い場所に行った訳ではないので5分とかからず戻ることができた。

手持ちの素材を見て、下の中くらいの防具を作成できるか確認した。PMが湧いているので、しばらく初級ダンジョンに近づけそうになりことから防具作成NPCで作成してこようと移動を始めた。

オンラインゲーム・アース（後書き）

まだ本編とも言つべき流れには乗れていませんがご容赦ください・。
・。

相方登場（前書き）

友達にこういう流れで行く。ってのを見せたら「テンプレだな。」
と言われました。

あえて言おう。テンプレ 万 歳 ！！
作者はこんなキャラです。サーセン。

相方登場

「お待たせ」

「大丈夫。待ってない」

僕は画面の前で苦笑いを浮かべた。

今は魔法使いではなく剣士、というより侍の姿をしたキャラでログインしている。そして画面の中で僕の侍の前に立つキャラこそ相方であるキャラルだ。職はプリースト（聖職者）。

どこのオンラインゲームでも支援系の魔法を得意とするジョブだ。

「今日はどこに行ってみる？」

「まかせる」

「一番困る返答だね……」

「何が困る？」

「えーと……。じゃあ沖縄とかどうかな？」

「着いて行く」

「了解」

知らない人にはそっけなく感じるかもしれないが、これは翻訳機の関係でこうなってしまうのだと理解して欲しい。

詳しい説明は省くが単語だけを読み取り接続詞などは省くように出来ている。どうしても知りたい人はどぞの翻訳機で日本語 英語 日本語とやってみるといい。それでなんとなく理解できるだろう。

「ここからだと船で1時間くらいかかったかな」

「釣り。食糧取る」

「OK。そうしよう」

「餌」

「大丈夫。2時間くらい釣ってられるよ」

「わかった」

「あつと、もう1時か。ごめんキャラルそろそろ落ちるよ」
「今日早い」

「うん。もう学校が始まったんだ」

「そう。仕方ない」

「ごめんね。また明日遊ぼう」

「わかった。おやすみ」

「うん。おやすみ」

チャットログにそう出たのを確認して、「アース」からログアウトする。そのままパソコンの電源も落とした。

僕はキャラルと時間が合わないのを残念に思いながら眠りについた。

敵襲来

周囲に気を配りながらゆつくりと進んでいく。もう別のモンスターの縄張りに入っている。姿は見えないが見られているのだろ。隙を見せたらやられてしまいそうだ。

「出てこないね」

「見られてる」

「それはなんとなくわかるけど……」

「気抜かない」

「はいはい。わかったよ」

僕は苦笑いしながらいつ飛びかかれてもいいように武器を構える。すぐ飛びかかってこないことから、CPUのモンスターではなくMPであるらしい。

一定レベルを超えると警戒音はなくなるので判断が難しい。

「厄介だな」

「うん」

「かと言って逃げれそうにもないしね」

「囲まれてる」

「勝てるかな？」

「相手次第」

「それもそうだね」

何の動きも見せないことに早々に痺れを切らしたのか、少しずつ包囲網を狭めてきた。

ゲームなので気配を探ったりはできないが、その代わりに周囲の敵を表示してくれるマップがある。そのマップの索敵範囲は意外と広

かったりする。

「ゴーレムか」

敵がある程度近づいてきたことによりその姿が見えた。ゴーレムは防御力と攻撃力は高いが他が決定的に低いモンスターだ。

「ボス」

「あの奥にいるやつ？」

「遅い抜ける。追いつかれない」

「わかった。一気に切り抜けよう」

そう言うとともに駆けだした。

目の前には2体のゴーレム。繰り出された攻撃を回避して左右から一気に駆け抜けた。

ボス。つまりプレイヤー同士で2対1の状況になる。

キャラルが補助魔法で敵の防御を下げる。僕は一気に懷に潜り込み武器を振るった。

ゴーレムは対物理・対近接能力は高いはずなのだが、僕の放った一撃でケリがついてしまった。

「雑魚」

「うわぁ……。はつきり言っただね……」

「事実」

「いや、僕も少しは思ったけど……」

「不満？」

「まあいいか」

キャラルが毒舌なのはいつものことなので深くは気にしないことにする。

レベルが低かったのか、あっけない程モンスターはすぐに倒れた。プレイヤーキャラが倒れたことで、取り巻きであるNPCのモンスターは散開してしまった。

「あれ？また来てる？」

「北・東」

マップを見ると索敵範囲の境界線付近にモンスターの群れが表示されていた。それもキャラルの言うとおり北と東だ。

「めんどろ」

「一番近い村はどっちだっけ？」

「南」

「戦闘になる前に逃げる？」

「うん」

僕は村に向かって走り出した。

マップに見えた限りでかなりの数が確認できた。体力は減っていないが精神的にあれと戦う気力が残っていない。

「追ってきてる」

「みたいだね」

「罨」

マップを見ると進行方向に、先ほどの2倍近い数の敵が待ち受けていた。お互いに足を止める。

「すごい数だね……」

「ウルフ」

「よくわかるね」

「集めやすい」
「なるほど……」

ウルフはプレイヤーが選択できるモンスターの中では、個体能力は下から数えた方が早いモンスターだ。

しかし、その代わりにNPCモンスターの統率能力と群れ形成スキルがとても高いため玄人に好まれている。

北と東は一定の距離で動きを止めたが、南の群れはこちらに向かって進軍しだした。

「どうしようか」

「村まで走る」

「戦わないの？」

「敵多い。勝ち目薄い」

「逃げきるのも大変だと思っけど……」

「補助魔法。回復アイテム連打」

「あはは。力技だね」

「不満？」

「ううん。それで行こう」

「わかった」

そう言うのと防御力を一定時間上げる魔法をかけてくれた。僕はその間に防御力重視の装備に換えておく。

準備が終わると同時に先頭集団が視界に入った。それはキャロルが予想した通りウルフの集団だった。

「行くよ。準備はいい？」

「いつでも」

「GO!!」

そうして僕らは敵の群れに飛び込んだ。

敵襲来（後書き）

タイトルを入れ忘れて一回全滅・・・。
心が折れるところでした・・・。

人類最強の敵（前書き）

サブタイは独断と偏見に満ちています。

人類最強の敵

「死ぬかと思った……」

僕らはウルフの群れから逃れて村に辿り着くことができた。キャロルが途中で魔法を誤爆した時は死を覚悟した。そんなこともあつてか、僕は精神的に疲れきった。そのキャロルが平気に見えるのが僕の疲労を悪化させているかもしれない。

「そう?」

「いや、キャロルの方が危ないじゃん。ライフゲージ真っ黒だよ?」

「錯覚」

「どこがだ……」

「回復する」

「お願いします」

回復魔法をかけてもらい一息つく。

回復アイテムはあらかた使ってしまった。

「アイテム補充しないとなあ」

「うん。もうない」

「ないの!?じゃあギリギリだったの!?」

「気のせい」

「気のせいじゃ……いや、いいや」

「大丈夫?」

からかわれているのだろうか?

とりあえず、僕は突っ込むのを放棄した。今の精神的に参っている僕を責めるような人は相当なドSだろう。

「そうだね。この村の港でも露店が出てるかもしれないし、行ってみようよ」

「わかった」

「お金は大丈夫？」

「うん」

お互いの資金を確認すると港に向かって歩き出した。

港には何隻もの船が接岸おり、相当な賑わいを見せていた。所詮はNPCだろ？という突っ込みは無しで。

プレイヤーが開いている露店を探す。露店で探すのは、村にある店だといいアイテムが売っていないからだ。そんな訳で、どこかの掲示板で「そんなにリアルにしたいなら薬局作れよ」という文を見た時は同意してしまった。

「いい回復アイテム置いてないね」

「貴重」

「まあね。仕方ないかな」

オンラインゲーム「アース」では他のゲームと違い、回復アイテムが非常に貴重だったりする。

「アース」では回復アイテムも特定のNPCに素材を渡して作ってもらうのだが、その素材のレア度が高く、作成するのに時間がかかるのだ。そんなこともあって僕は買い溜めていたのだが、先ほどの戦闘、というか逃走でその大半を失ってしまったのだ。

「誰かまとめて置いてないかな？」

「難しい」

「そうなんだけど。ってキャロル？どうかした？」

突然キャロルが立ち止まった。

何も反応を返してくれないので、キャロルの向いている方に目を向ける。

「うっ！」

思わず喉の奥から声を出してしまった。

？それ？はあまりにも異質だった。

僕とキャロルの視線の先には黒く光沢の放つ生き物が露店を開いていた。

『なんだって等身大のゴキ。リが露店開いてるんだ！？』

何故かとてもリアルだった。

製作会社何やってるんだと思わずにはいらなかった。

「うつぶ！気持ち悪くなってきた……」

「コウ。回復アイテム見つけた」

コウとは僕のキャラクターネームだ。晃あやひだからコウ。音読みにしただけだ。

ええ、ネーミングセンスなんかありませんよ。

「出来れば聞きたくないんだけど……」

「どうした？」

「いや、なんでもない。で、回復アイテムどこに置いてる？」

「あそこ」

キャロルの示した先は、やはりあの黒い物体の方だった。もちろん誰も近づこうとするキャラはいない。なぜかNPCすら避けているように見えるから不思議だ。

「キャロルは平気そうだね……」

「？」

「うん。わからないならいいんだ……」

歩き出したキャロルに付いて黒い物体に近づいて行く。そして黒い物体の前で立ち止まって物色を始める。

「品揃え、凄い」

「確かに……」

そう、品揃えは確かに凄い。

貴重な回復アイテムから始まり、レア度の高い素材、作るのが難しい上級の装備、難易度の高いクエストでしか手に入らないアイテムなど、とんでもない品揃えだった。

『でも、やっぱり見た目が……』

「これ20個とこれ1個ください」

僕は声を出さずに呻くが、キャロルは気にせず目当ての物を購入している。

「コウ？買わない？」

「買つよ」

出来るだけ視界に入らないように回復アイテムを数個購入した。買い物が終わるとすぐに視界から除外し、キャロルを連れて歩き出

した。

「これだけあればしばらく大丈夫かな」

「うん」

「それにしても、キャロルはあれを見てよく平気だったね」

「？」

「あのプレイヤーだよ」

「何？」

キャロルはそう言つと後ろを振り返つた。

直後、港内にキャロル絶叫が響き渡つた。

キャラル休止

「大丈夫？」

画面の前で苦笑いしながら声をかける。

「涙出た」

「あはは。平気な顔して近付いて行くから、アレは大丈夫なんだと思っただよ」

「アレ、大丈夫じゃない」

「泣いちゃうくらいだからね」

「泣いてない。涙出ただけ」

「あはは。そういうことにしておくよ」

「コウ絶対わかってない！」

「わかってるよ。泣いてないんでしょ？」

からかうのも面白いけど、あまりやると機嫌を取るのに数日かかる。そのことを夏休みの間に学習していたのでこれ以上つつくのはやめておいた。

「わかればいい」

「さて、目当ての物も買えたし、明日も学校があるから僕は落ちるよ」

「コウ」

「ん？どうかした？」

「私、しばらく接続できない」

「あ、そうなんだ」

「ごめん。遊べない」

「気にしないで。じゃあ、僕はしばらく魔法使いでログインしてる

から、ログインできるようになったら呼び出してね」

「わかった。コウ、ありがとう」

「あはは。どういたしまして」

「コウ。おやすみ」

「うん。おやすみキャラル。またね」

文字が表示されたのを確認し、「アース」からログアウトする。

「キャラルはしばらく接続できないのか・・・。」

僕は布団に入ってから意識が落ちるまで、顔も見ることがないキャラルのことばかり考えていた。

翌朝の晃君

「はぁ……」

「でかい溜息だな」

「あきちゃんどうしたのー？」

いつもの様に河藤兄妹と登校中、昨晚キャロルに言われたことを思い出してしまい思わずため息を吐いてしまった。

「あれ？そんなに大きかった？」

「ああ、聞いてくれと言わんばかりだったぜ」

「うん。大きかったよー」

「そっか……」

相方がオンラインゲームにしばらく接続しないってだけなのにな。女々しいと内心では思っているのだが、どうしても気分が沈んだものになってしまっている。

「つて、黙るのかよ！」

「え？何が？」

「あははは。あきちゃん上の空だー」

「そこは溜息の理由を話すところだろ！」

「そうなの？」

「うんうん。とっても気になるよー」

「そっか……」

どうやら河藤兄妹にも心配をかけてしまったらしい。学校に到着するまでになんとかしないといけないな。

……そういえば、しばらくつてどれくらいになるのかな。せめてだ

いたいの期間を聞いておけばよかった。

「って、結局黙るのかよ!!」

「あ、ごめん。聞いてなかった。もう一回言って」

「だーかーらー!」

「あははは。今日のあきちゃん凄ーい」

何がどう凄いのかわからないが茜は始終笑いつぱなしで、大助が上の空になっている僕に話かける。

この流れが教室に到着するまで繰り返された。

教室に着くといつものメンバーが僕の周りに集まってくる。

「真樹ちゃーん。今日のあきちゃん凄いんだよー!」

「聞いてくれよ衛! あきらのやつがさー!!」

そしていつものように会話が始まった。授業まで後20分ほど余裕がある。

皆の会話を聞き流しながら、今日は「アース」で何しようかなと頭を巡らせる。

『剣士はキャラルと一緒に上げるって約束したから、やっぱりソロで魔法使いか。』

キャラルと遊ぶようになってから全く顔を合わせないってのは初めてかもしれないな。なんだかんだで毎日30分は必ず遊んでたからなあ』

「……重症ね」

「……そうみたいだな」

「でしょー。登校中もずっとこうだったんだよー」

「まったく！あきらのやつ人が話しかけても全部聞き流しやがんの！」
「どうしたのかしらね？」

「昨日はこうじゃなかったよな？」

「昨日は一緒に帰ったけどこんなじゃなかったよー」

「だったら家に帰った後になんかあったのかしら？」

「どうせ例のオンラインゲームだろ」

「でも、今の晃君の症状って恋煩いみたいよね」

全員視線を晃へ移す。

視線は一点を見つめているが定まっておらず。時折、切なげな溜息を吐いている。更に、たまに顔がニヤついたりしている。

「……なんというか、今の晃は、ヤバイな」

「そうね。友達じゃなかったら絶対に近寄りたくないわね」

「うん。今のあきちゃん気持ち悪いー」

「衛。友人としてなんとかしてくれ」

「俺に振るのかよ！付き合い長いんだから大助がなんとかしてくれよ」

「無理だ。こんなにキモいあきらは初めて見る」

「なら俺とかどうしようもないだろ！？付き合い高校からだぞ！？」

「いや、お前ならできる！むしろやれ！」

「あれ！？命令！？」

真樹は男連中がわいわいとコントを始めたのを呆れ顔で見る。

ふと気がつくと親友である茜が会話に参加していない。

「茜？どうしたの？」

「あ、真樹ちゃん。何かね今のあきちゃん見てると胸が痛いんだー。なんでかな？」

「そうなの？それは私にもよくわからないわね」

どうやら私の親友は胸の痛みがどこから来ているのかわかっていないらしい。

しきりに「なんだろう?」と首をかしげいる。

後ろに目を向ける。男二人はまだコントを続けている。

「ふう……。これから大変ね」

そう呟くが、それに反して顔には笑みを浮かべていた。

隠しクエスト

気がつくと放課後になっていた。

今日一日の記憶は曖昧だ。

先生に何度も注意されたような気もする。はつきりとは覚えていないが……。

「おーい。あきちゃん。もう放課後ですよー」

「あ、うん。……あれ？皆はもう帰っちゃった？」

「うん。大ちゃんと衛ちゃんは部活に行ったよー。それと真樹ちゃんは今部活休みなんだけど部室に顔を出してから帰るから、晃君と先に帰っていいわよ。』だってー」

「そっか。それじゃあ帰ろうか茜」

「うん。早く帰ろー」

学校に長居する理由もないのでバックに教科書を詰め込むと教室を出た。

二人並んで生徒用の玄関に向かう。

茜は歩くのが他の人に比べてゆっくりなので速度を合わせる。いつもなら少し気になるところだが、今日は急いで帰る理由もないので気にならない。

「あきちゃん今日は一日ぼーっとしてたねー」

「そうかな？」

「そうだよー。話かけても反応なかったし、少し寂しかったよー」

「ごめん。少し考え事してたんだ」

「何考えたのー？」

「ゲーム内でいつも一緒に遊んでる人がしばらく接続できなくなるらしくてさ。それで戻ってくるまでどうしようかなくて」

「そうなんだー。仲がいいんだねー」

「アースでは他に知り合いがないからね」

「どうしていないのー？」

「んー。特に必要じゃなかったからかな。僕はあんまり自分から話かけるようなタイプじゃないしね」

「あきちゃんは根暗さんだねー」

「そうかな？」

「あはは。そうだよー」

何が面白いのかわからないが楽しそうなので良しとしよう。ちょっと傷ついたが・・・。

「ねえ、あきちゃん。あきちゃんはその人のことが好きなのかな？」

笑い声が消えたと思うと、茜は唐突にそんなことを聞いてきた。

「好き……ってキャラルのこと？」

「ふーん。キャラルちゃんっていうんだー」

何故だろう。急に居心地が悪くなった。例えるなら彼女に浮気を言及されていような……。

茜と付き合っている訳でもなければ、キャラルをそういう目で見たこともないというのに。

「好きとかは考えたこともないなあ。何せ顔もみたこともないし……。オンラインゲームならネカマって可能性もあるし……」

「ネカマ？」

茜がかわいらしく首をかしげたりしている。僕は目を逸らして説明する。

「顔が見えないのをいいことに、男が女の振りをしてゲームするとだよ」

「なんでー？」

「ネカマはゲーム内通貨やアイテム目当てだったり、単純に男を騙して楽しんでるんだよ」

「キャラルちゃんもネカマさん？」

「どうかな？性別は聞いたことないからわからないよ」

「そうなんだー。あきちゃん詳しいんだねー」

「あははは！」

まさか他のオンラインゲームで騙されたとは言えない。あの頃は知識もなかったし、若かったな僕。

「あきちゃん？何で遠い目してるのー？」

「いや、なんでもないでありますよ？」

「あはは。変なあきちゃんだー」

動揺して変な言い方になってしまった。あれは僕にとっての黒歴史だからな。

忘れよう。……うん。よし！忘れた！

「あきちゃん？どうしてガッツポーズしてるの？」

「なんでもないよ」

「凄くいい笑顔なんだけど、なんだか裏を感じるよー」

こういうときだけ鋭いな茜。普段抜けてるくせに……。

「むっ！今誰かに馬鹿にされたような気がするよー」

「あはは。考え過ぎじゃない？」

「そうかなー……」

唸りながらしきりに首をかしげている。茜。……やるじゃない。

「っと、じゃあ僕はこつちだから、茜また明日」

「うん。また明日ねーあきちゃん」

挨拶して軽く手を振る。

茜が前を向くのを確認して帰路につく。

「ただいまー」

反応がないのはわかっていたが返事がないとやはり寂しい。
自分の部屋に行き制服から着替えるいつものようにパソコンを起動した。

「今日は一日魔法使いか……」

剣士はキャラルと上げると約束したので魔法使いで遊ぶことにした。

「さて、どうしようか」

とりあえず魔法使いでログインし、持ち物の確認をしながら予定を考える。

「そついえば低レベルダンジョンのアイテムがいるんだっけ」

低レベルだと手に入るアイテムもそれ相応になるので、あまり気乗

りはしない。

「これと言ってやりたいこともないし、ここからも近いし、たまにはいいか」

場所が場所なのでアイテムの確認もそこにしてダンジョンに向かった。ダンジョンと言っても草木の生い茂る山や森の中だが、入口に到着するとたいして周囲の警戒もせずに進んでいく。囲まれたところでどうとでもできる。

道という物がないので適当に進んでいく。周囲が薄暗いが気にしない。

コンパスがあれば街道に出るのも容易だからだ。

「あれ？」

ここで重大なことに気がついた。そのコンパスを持っていない。

「やばい。買うの完全に忘れてた」

剣士では所持しているのでいつも通り気にせず来てしまった。

「うーん。レベル低い場所だし、適当に行けばそのうち出れるか」

そう樂觀視するとまた歩き出した。

およそ一時間後。

「完全に迷子になった……。どこだよこゝ……」

リアルタイムなので周囲はもう闇の中になっている。さらに、だいぶ適当に進んだので方角もさっぱりだ。

「どうしようか……」

しばらくどうしようか悩んだが、何も思いつかないので再度歩き出した。

「敵のレベルが低すぎて死に戻りもできないし……。まあ、そのうちどこかに出るだろ」

仕方ないのでひたすら歩くことにした。

「……これじゃあいつになるかわかったもんじゃないな」

愚痴を言いながら操作を続ける。

「あれ？なんだこれ」

進んでいくと目の前に洞窟が出現した。

「このダンジョンこんなにあつたか？」

レベルの低いアイテムは頻繁に使うことになるのでよく顔を出しているが、こんな洞窟は初めて見た。

現実だったら絶対に踏み来ないだろう嫌な雰囲気が出ている。

「うーん。ゲーム内なら死んでも痛くないし……」

結局、僕は好奇心に負けて行くことにした。
ただでさえ周囲が暗いというのにさらに洞窟の中だ。周囲は何も見えない。

「コンパスはないのにこんなのはあるんだよね……」

そう呟いてアイテムを使う。

「いつも思っただけど、松明ってどうなの？」

洞窟内が照らされ周囲が見えるようになる。だいぶ深いようだ。視界が確保されたのでそのまま奥に進んでいく。

「強いモンスターが飛び出すなんてことはないですね？」

何故か敬語になったが、そんなこともなく。
そのまま洞窟の一番奥まで着いた。

「何にもないのかよ……」

僕の捜査するキャラが照らしている場所には、進めそうにない大きな壁が立ちはだかっていた。

「こうなると意味もなく周囲探索したくなるよねー。例え何もないとわかっていても！」

そうして壁に近づいた時だった。

「え？」

突然画面が暗転した。そしてすぐにムービーが入った。僕の操作していた魔法使いが台詞を言う。

『これは……魔法文字か？』

そう言つて松明を壁に近づける。確かに文字のような物が書かれている。

もちろん僕には読めない。しかし画面内で魔法使いが読み上げる。

『これを見た者にすべてを託す。我等にはどうすることも出来なかつた。このままでは……』

「死の間際に書いたなら引つ張るなよ……。そんなことしてるから駄目だったんじゃない……。しかもイベント強制だし……」

僕はどうでもいい突っ込みを入れながらも耳を傾ける。

『我等の身に起こったこと、そしてこの後起こるであろう事態について記した書物は別の場所に保管されている』

「いや、メモしたここに置いとけばいいのに……」

『場所は……』

「また引つ張るのか……」

『げふっ！私も長くは持ちそうにない……』

「だったらそんなこと書かずに要件書こう！？」

『場所は富士の樹海、その奥に祭られている社だ。』

「なんでそんなめんどくさいとこに置いてきたの！？ここ九州だよ！？」

『後は頼ん……。書かれているのはここまでか……』

「余計なとこで引つ張ったから結局最後まで書けてないし……」

そこでムービーが終わる。

「……………」

僕はなんとも言えない気持ちになりながらも一度壁を調べる。

ムービーには入らなかったが、『これ以上のことは書かれていない。』

』と表示された。

何か納得できなかった僕は周囲を調べ回った。

すると壁の右端辺りで何かを見つけた。

『ん？ここにも何か書かれている』

「お、何だろう」

『よしおへ。今夜はカレーです』

「よしおって誰だああああああ！！！！というか製作会社遊び過ぎだろおおおお！！！！！！」

僕の絶叫が響き渡った。

隠しクエスト（後書き）

最後の方でギャグに走ってしまった。
だが後悔はしていない。
はい。次からまじめな展開にします。

クエスト名「EARTH」

「あれ？メッセージ受信してる。いつの間に……」

気がつくと僕のキャラクター宛てにメールが届いていた。

「しばらく接続できないって言ってたし、キャロルじゃないだろうし……」

魔法使いの方にメッセージを送ってくるのはキャロルしかいないため首を傾げながらもメッセージウィンドウを開いた。

「なんだこれ？」

送られてきたメッセージには差出人が乗っていないかった。

「クエスト名、EARTH……？」

なんだろうこれは、クエストに入るとメッセージが送られて来るようなものはどこの攻略サイトでも見たことがない。

一抹の不安を抱いたが、またしても好奇心に勝てず差出人不明のメッセージを開く。

「えっと、クエスト名EARTH」

——以下メッセージ——

題名：クエスト名「EARTH」

本文：

あなたは隠しクエストEARTHを発見致しました。

現在あなたが操作しているキャラクターはほかのクエストを受注できなくなります。

そしてこのクエストを受注する際は、現在受けているクエストが全て破棄されることになります。

しかしその代償としてEARTHを攻略までの間に限り、こちらから強力な防具を貸しだし致します。

そのことを承知の上でEARTHを受けるのであればYES、受けないのであればNOと入力してください。

「なんだこれ？シークレットっぽいし喜んでいいのかな？」

まず入力をどこにしたらいいかわからないし、でも装備の揃ってない魔法使いには防具は魅力的だからなあ。

「まあいいか。どうせ魔法使いは一人なんだし」

入力場所がわからないが、とりあえずYESと発言してみる。

「お？また来た」

新しくメッセージが届く。

以下メッセージ

題名：クエスト名「EARTH」

本文：

クエストEARTHの受注を確認しました。

受注されていたクエストは全て破棄されました。

装備欄にクエスト攻略まで装備が追加されました。

このクエストについては例えば知り合いであっても教えるようなこと

はしないでください。
協力な防具の横行はゲームバランスが崩壊してしまう恐れがあります。

それではオンラインゲーム「アース」をお楽しみください。

by 開発スタッフ

「なるほど。開発スタッフの悪戯か。というかこれでいいのか製作会社……」

製作会社に不安を覚えてしまった。とりあえずクエストは受注していなかったなので確認する必要はないが、先ほど書かれていた防具の確認を試してみる。

「うげ。なんだこの勘違いした性能は……」

現在発見されている最強と言われる防具がゴミに見える性能だった。

「いくらなんでも強過ぎじゃないか……?」

クエストを受注したことを若干後悔したが、取り消す方法もわからないので諦めた。

「仕方ない。装備がいらならさっさとクエスト終わらせればいいんだしね」

それに隠しクエストがどういうものか興味がある。

「次は富士の樹海か」

そう呟いて時間を確認する。

「12時か。今日はもう遅いし、クエストは明日から進めよう」

キャロルが戻ってくる前にこのクエストを終わらせようと決めて、その日はパソコンの電源を落とした。

噂

「おはよう」

「あきちゃんおはよー」

「ようあきら。今日は普通だな」

教室に到着すると河藤兄妹が近づいてきた。
他二人はまだ来ていないようだった。

「普通って……。衛と真樹はまだ来てないの？」

「真樹ちゃんはまだ来ないみたいだよー」

「衛のやつは何かを嗅ぎつけてどこか行ったぞ」

「え、衛がそういう行動をとるときって……」

「ああ、何で感知してるのか知らんが変な噂拾ってくるよな」

「今度は何かなー？」

衛はなぜか2ヶ月に一回の周期で朝教室におらず、どこからともなく噂話を拾ってくるのだ。

しかも衛の持つてくる噂は、証拠や根拠がないというのに今のところ全て事実だった。

噂話が好きという訳でもないのに。

「そっいえば、前校長の痴漢で逮捕とかあったね」

「あー、そんなこともあったな」

「あの誠実そうな外見からは想像できないよねー」

「外面がいいからこそ中身はつてやつじゃない？」

「なるほど。つまりあきらも……」

「ええー！あきちゃん痴漢してるのー！」

「しないよ！大助も誤解生むようなこと言わないでよ！」

「わからんぞ……。もしかしたらあきらなら……」

「あきちゃん……」

「あー！もー！大助そろそろ怒るよ！」

「もう怒ってんじゃねえか」

「あははは。あきちゃんこわーい」

いつものように馬鹿なやり取りをしていると、廊下から騒がしい足音が響いてきた。そしてそのまま教室に飛び込んでくる。

「おー！いるいる！」

「おはよう衛。今日も朝から元気だね。疲れない？」

「いつもこれだとそろそろ鬱陶しいよな」

「衛ちゃん近所迷惑だよー」

「ええーい！うるさい！面白い情報を仕入れてきてが教えてやらないぞ！」

「ごめんごめん。それで面白い情報って何？」

「よくぞ聞いてくれました！」

「別に俺らは聞いてねえよな」

「そうだねー」

河藤兄妹が冷たい対応をする。

大助の対応はいつも通りだが、今回は茜まで加勢したせいかわは教室の隅で『の』の字を書いている。相変わらず見ていて飽きない人物だ。

「ちょっと二人とも」

「冗談だよ衛。戻って来いよ」

「そうだよー。冗談だよー」

「……聞きたいか？」

「あー聞きたい聞きたい」

「聞きたいよー」

「とつても聞きたいか!？」

「はいはい。聞きたい聞きたい」

「聞きたいよー」

「どうしても聞きたいか!？」

「いや、別に」

「そこまでじゃないかもー」

衛は再び『の』の字を書き始める。気配だけなら床にめりこんでいるように見える。

「衛！僕はどうしても聞きたいよー！」

こうなつたときのフォロー役はいつも僕だ。

「よろしい！ならば晃には教えよう！」

「立ち直りはええ！」

「私びつくりしたよー」

「お前らには教えてやらん！」

「まあいいけどな。あきらから聞けばいいんだし」

「うんうん」

「そんなことはせん！」

「まあいいじゃない。教えてよ衛」

「ふん。お前たち二人は寛大な俺に感謝しろ」

そついうと偉そつに腕を組んでふんぞり返る。そろそろつぎい。

「さつき職員室で聞いたんだが、どうやらこのクラスに転校生が来るらしいぞ」

「へー。こんな時期に転校なんて珍しいね」

「偉そうな割に大した情報じゃねえんだな」
「すごい。転校生来るんだー」

反応は三者三様だった。

衛はなぜか両手を組んだまま頷く。

「そうだな。ここまでなら大した情報じゃないんだが、俺の情報はそれだけじゃないんだぜ！」

「まだ何かあるの？」

「ていうかテンション高すぎてうぜえ」

「何ター？」

「いいかよく聞け！どうやらその転校生は日本人じゃないらしいぞ！」

「「へー……」」

「そうなんだー。外人さんかー」

僕と大助は気の抜けた返事をした。唯一茜だけは純粹に驚いているようだった。

「その二人。リアクションが薄いぞ」

「うん……。まあ……」

「引つ張るほどの情報じゃなかったな……。少し期待した俺が馬鹿だったわ……」

「えー？そうかなー？」

茜は不思議そうだが、茜はなんというか、あれなのでスルーした。そうこうしている内に真樹が教室に入ってきた。

「あら？晃君と大助君どうしたの？」

真樹はこっちを見るなり二人のテンションに疑問を抱いたらしい。
大助は語るのも億劫そうだ。

「いや、あのね……」

僕は真樹にことの成り行きを教えた。

噂（後書き）

キャラが暴走して長くなってしまった・・・。

噂(2)

「ふーん、転校生ねえ」

「衛の情報だと外国人らしいよ」

「外国人……」

真樹はそう呟くと考え込むように腕を組んだ。何か呟いているが、声小さくて聞き取れない。

「真樹？どうかしたの？」

「え？うつん。ただ、こんな時期に来るのが珍しいなって思ってたね」「そうだよー。珍しいよねー」

茜が会話に入ってきた。どうやら衛と大助がいつも通り漫才を始めたのでこちらに来たらしい。

「茜。どんな会話の流れかわかってるよね？」

「え？も、もちのろんだよー？」

声がどもっているし最後が疑問形だ。しかも視線が合っていない。二人で疑念の混じった視線を送る。

「うつ……。わ、わかってるんだよ？本当だよー？」

「だったらなんで最後が疑問形なのよ……」

「じゃあ茜、何の話をしたのか言ってみてよ」

「え」

真樹が溜息を吐いている。僕は苦笑いを浮かべて茜を見る。茜は何やら小声で言い訳を並べているようだ。

「全員席に着け」

そこで、先生が教室に入ってきた。

クエストスタート

直帰。

これは帰宅部に許された特権だ。

……帰宅部万歳！

僕は早々に帰り支度を済ませる。

「僕はすぐに帰るけど、大助と茜はどうする？」

同じ帰宅部仲間の二人に声をかける。

「俺は今日も衛んとこで運動してから帰るわ」

「私は帰るよー」

「そっか、部活動頑張ってね」

「おう。じゃあなあきら」

「さてと、帰ろうか茜」

「わかったー」

最近は大助が部活に行くためお馴染みとなった二人で帰る。

茜は何かいいことでもあったのか機嫌が良さそうだ。

「何か機嫌がいいね」

「えー？そうかなー？」

「うん。だらしく頬が緩んでるよ」

「うえ！？」

「嘘だよ」

茜が自分の顔を押さえた後、拗ねたように顔をしかめた。僕はその顔を見て嘖き出してしまった。

「むー……。あきちゃんの馬鹿ー！」

文句を言うと怒って先に行ってしまった。

ここで放置すると後がめんどろだということが今までの経験でわかっているため、機嫌を取るために走って追いかける。

「待ってよ茜。僕が悪かったからさ」

「謝って済むなら警察はいらないんだよー！」

「この程度のことと呼ばれてたら警察は大忙しだろうね……」

「あきちゃんには謝罪の意思が感じられないもん！」

「……僕にどうしろと？」

「ジューズ飲みたいなー」

茜は笑顔でそんなことを言い出した。

あまりの豹変ぶりに一瞬焦る。そして思わず財布の中身を確認する。
残金160円。

「あのですね茜さん」

「なーに？」

「僕は現在、160円しか持っていないんですよ」

「ジューズは買えるよー？」

かわいらしく首を傾げて見せる。つまり、知ったことが、という訳ですね。

「出来れば勘弁してはもらえないでしょうか？」

「あー。自動販売機見つけー」

自動販売機に向かって小走りで近づいて行く。

目的地に着くところらに向かつて手を振ってくる。
普段は弱気なのだが……。

『どうして君はこういうときだけ強気なんだい？』

僕はそう思わずにはいられなかった。

仕方ないので諦めてお金を渡してやる。喜々としてお金を受け取る
と、自動販売機とにらめっこを始めた。

お茶にするか清涼飲料水にするかで悩んでいるようだ。

少しは遠慮して120円のジュースにする。

という選択肢はないらしい。

結局お茶にしたらしく、両手で大事そうに抱えて戻ってきた。

「あきちゃんに奢ってもらっちゃったー」

「……奢る？」

あれは奢ると言っているのだろうか？

脅し取るが正しいような気がするんだが……。

「あきちゃん。ありがとねー」

「……どういたしまして」

屈託なく笑う茜を見ると、些細なことは気にならなくなった。
そうこうしていると、いつもの分かれ道に到着した。

「さて、じゃあここでお別れだね」

「そんなー。まだ付き合ってもいないのにー」

「……」

「……」

二人の間に沈黙が流れる。
額を押さえながら茜に尋ねる。

「……茜」

「なーにあきちゃん？」

「それ、誰に入れ知恵されたの？」

「えっとねー。真樹ちゃんだったかなー？」

「へえー。そっかー」

「あきちゃん怖いよー。笑ってるなのに目が笑ってないよー」

真樹……明日、必ず問い詰める。僕は、固く心に誓った。

「はあ、まあいいや。茜、また明日ね」

「ばいばいあきちゃん。また明日ねー」

言いようのない疲労感を抱えたまま家に向かう。

家に着くと、着替えを済ませアースを起動する。

剣士でログインするがキャラルの姿はない。溜息を吐くと、ログアウトして魔法使いを始める。

アイテム覧には悪魔とも言える装備が目についた。どうやら夢や幻の類ではなかったらしい。

「だとすると、次は富士の樹海か……」

クエストが始まる前に渡されたということは、これを装備しなければクエストをクリアすることが出来ないんだろう。

あまり気が乗らなかったが、発見されてすらいらないクエストへの興味が勝った。

支給された装備品を身につける。

「クエスト：EARTHの説明を致します」

すると、どこからか声が聞こえてきた。

クエストスタート（後書き）

高校生にもなって「もん！」はな（以下略

クエスト名「EARTH」 2

……。

『なんだこれは？』

空中に浮いている不思議な物体を凝視する。

見た目はゲームの制作会社がつたマスコットキャラ・アース君に似ている。

アース君は地球に手と足と顔が付いているだけなのだが、微妙にリアルなせいで不気味過ぎるとある雑誌で取り上げられていた。しかし現在僕の眼前に浮いているこいつは違った。それは土星だった。思わずインターネットで検索したので間違いないだろう。

「……なぜ、土星？」

返事など期待していないが突っ込まずにはいらなかった。

「見た目が土星なのは、このクエストを作成した者の暇つぶしです」

「ああ、そうなんだ……」

僕は虚脱感に苛まされた。

ずっとこのままなのかと考えていたが、その心配は杞憂だったようですぐに不気味な顔が評判のアース君に戻った。

「悪ふざけはこころ辺にしてクエストの説明をさせていただきます」

出来れば最初からふざけて欲しくなかったが、アースにはこの程度の悪ふざけはいくらでもあるので諦めることにする。

「クエスト：EARTHでは特定の場所に保存されている宝物を回収していただくことになります。」

今回支給された装備はその宝物を守護するモンスターの討伐に欠かせないものです。

装備があつたとしても討伐出来ない可能性があります。というよりは討伐出来ない可能性の方が高いです。しかもこのクエストは一回限りしか行うことが出来ませんのでご注意ください」

この装備で倒せないって、そのモンスターのパラメータおかしいだろ！

そんなことを考えながらアース君が吐き出し続ける文を読み飛ばしていく。

「クエストをクリア出来た場合は、装備品及び特殊なアイテムが手に入ります。それとクエストに失敗した場合は現在の装備等が白紙に戻されます」

「特殊なアイテムか……。どんなのだろう？」

「最後に、次の指定地には案内人である私がいないと侵入することが出来ないようになっております。なので次の指定地までになりませんがどうぞよろしく願います」

「うげっ」

それは予想外だった。

思わずうめき声をあげてしまった。

「このセクハラジジイみたいな嫌な笑顔してるこいつを連れて歩かないといけないのか……」

非常に鬱だが、クエストを続けるには必要なので諦めるしかないの

だろう。

「……前途多難だなあ」

しかし、愚痴を言っても始まらない。

どうなるかわからないが、とりあえず行動してみるのがいいだろう。

「次は富士の樹海か……」

案内人がいるということはコンパスの効かない場所なのだろう。
でなければ案内人など付ける必要がない。

「まずは港に出よう」

僕は行動を開始した。

クエスト名「EARTH」 3

「東京方面に行く船はどれだ？」

たくさんの人が行き交う間を縫う様に目的の船を探す。

船はこれと行って整頓されている訳ではないので大変だ。

「うっ！」

露店の開かれている区画を抜けようとしたとき、そいつが目に入ってきた。

キャロルといるときに見かけた例の黒い物体だ。

品揃えは良いのだが妙にリアルなアレなので、周囲に近づこうとする勇者はいなかった。

……どうでもいいことだが、アースにも勇者というジョブがある。攻略サイトいわく自宅警備員のことらしい。

なんでも死なせない用に社会復帰させるゲームになるのだとか……。アースにおいて、最高難易度を誇るゲームでもあるらしい。

はい。どうでもいい話兼、現実逃避終了。

自分の所持しているアイテムを確認する。

ほぼ初期と言っている状態なので、ろくなアイテムを持っていない。気持ち悪いので出来れば近づきたくはないのだが……。

チャンスが一回しかないクエストなので、回復アイテムを持ちすぎるということもないだろう。

移動費用を頭で計算しながら、アレをなるべく視界に入れないように近づいて行く。

「やあ、いらっしやい」

アレの前で足を止め、露店のアイテムを物色していたところ話かけられた。

「どうも。露店見させてもらいますね」

「どうぞどうぞ。何故か私の周りには客が寄ってこなくてね。ゆっくり見て行くといい」

『この人、本当にわかってないのか？』

それならばその感性を疑ってしまう。

「まあ確信犯だけど」

「……そりゃそうでしょうね」

何かしゃべる度に頭や触角が動いていて気持ちが悪い。
できるなら関わりたくはないだろう。

回復アイテム以外は特に必要な物はないようだった。そのため予定通り回復アイテムを購入すると急いで撤退する。

買い物の途中もずっと話かけられていたが、見えない聞こえないを貫き通した。

「まいどあり」

「それじゃあ僕はここで……」

「あ、そうそう、君さ」

呼びとめられたがもちろん無視である。競歩で距離を開ける。

「そんなんで街中歩かないほうがいいよ。これは善良な一般市民からの警告だ」

最後まで無視を決め込んだが、その一言は頭に残った。……一般市民かどうかは別として。

その足で東京行きの船を探す。
しばらく歩きまわっていると、大きめの客船が東京行きの船だとわかった。

出発はおよそ10分後。

やることはないが、船の上で待機することにする。乗り遅れると次の船は30分待たないといけない。その方がめんどうだ。

船の出発までの待ち時間、意識はまだ行ったことのない樹海に向けられていた。

クエスト名「EARTH」 4

「ここが富士の樹海か……」

僕の目の前には、鬱蒼と生い茂る草木が立ちはだかっていた。コンパスに目を落とす。狂ったように回転しており、その役目を果たしていない。

ゲームとは言え出来れば足を踏み入れたくない空間だった。

「それにしても……。どう進んでいけばいいんだ？」

獣道すら見つかりそうにない。

アース君が案内してくれるという設定のはずだが……。

僕の近くに浮遊している、顔が気持ち悪い地球儀に目を向ける。最初にクエストについて説明をしてから動きがない。ここにくれば動くのかと思ったがその気配もない。

「どうしたもんかな……。とりあえず入ってみようか」
突っ立っていても仕方がないという結論に至り、樹海に足を踏み入れる。

一歩樹海に踏み入ると、そこは外とは別の世界であった。人の侵入を許さないかのように草木が進路を阻んでおり、100m先が見通せないほど薄暗い。バーチャル世界だというのに肌寒さを感じた。

ここだけ木々がやたらリアルに作られている気がする。

「凄い……」

僕は無言で立ち尽くしてしまった。しばらく棒立ちで見入っている

と、突然に例の地球儀が反応を見せた。

「おはようございます。それでは案内人致します。しっかり付いてきてください。

迷子になった場合は二度とこの樹海から出られない恐れもありますので、ご注意ください」

気持ちの悪い笑顔でこちらを見つめたまま移動を開始した。

動きはそれほど速くないのだが、見通しがとても悪いので何度も見失いそうになる。

上下左右に行ったり来たりされ、方角が完全にわからなくなった頃、その場所に辿りついた。

「目的地に到着しました」

「洞窟？」

僕の前には一人通れるか通れないかといった具合の洞窟があった。目の前を通ったとしても、言われなければ気がつかないだろう。

「それでは私はここで失礼致します」

そう言うときアース君は徐々に薄くなっていき、そのまま消えるようにいなくなった。

なんというか、いかにも何か出ますよという雰囲気洞窟だった。

「出来れば入りたくないけど……」

ゆっくりと振り返る。

道なき道を進むことになる樹海を抜けるよりは、確実な道がある分まだらう。樹海に踏み込んだ時点で、僕には進むという選択肢以

外は残されていなかった。

アイテムの松明を取り出す。

光源を確保すると、洞窟に足を踏み出した。

一つ目の試練

入口は狭いように感じたが、中はそれなりの空間があったので移動は楽だった。

足元には薄く水が流れている。洞窟内に水源でもあるのだろうか。

僕は何が起きてもいいように周囲を警戒しながらゆっくりと進む。

松明の見える範囲にはこれといって何かがある訳ではなかったが、警戒するにこしたことはない。それに何か重要なアイテムが転がっているかもしれない。

そうしてしばらく進むと、進行方向に影が射した。

通路の真ん中に宝箱が転がっていた。

「……………」

松明の明かりが届く範囲で立ち止まると、無言で魔法を選択する。

魔法の詠唱があり、紙一重で視界に入っている宝箱に向かって、魔法をぶっぱなした。

経験値とステータスポイント取得のログが流れる。

「……………」

アースには宝箱という物は存在しない。

だというのに、なぜかダンジョン内に入ると、稀にミミックという宝箱に擬態するモンスターがいることがある。

「そのほうが面白くないですか？」

とは公式HPの談だ。

罠として機能しないミミックなど、ただの雑魚だと思うのだが……。

「あんなのでそこそこの経験値が入るなら宝箱だろw」（wは笑いという意味）とどこかの掲示板を見た。納得した。
どうでもいいことを思い出しながら移動を再開する。
松明の明かりも僕に合わせて移動する。

「…………冗談だろ？」

明かりで照らされた先には、道幅いっぱいにはびっしりと敷き詰められたミミックの群れがあった。

「これを全部倒さないといけないのか…………」

見える範囲だけで20に届きそうだ。

おそらく奥にはまだまだいるのだろう。

手強くないが、ただめんどくさい。

僕は溜息を吐くと、威力の高い範囲魔法の詠唱を始めた。

一つ目の試練（2）

「限りがないな」

僕は進路を阻んでいる宝箱の群れに魔法を放ちながら溜息を吐く。魔法の詠唱時間があるため少しづつしか先に進むことが出来ない。

「実はバグでしたなんて落ちはないよな……？」

際限なくミミックが湧き続けるため少しづつ不安になってきた。

本当に終わらないんじゃないかと考え始めた頃、宝箱の一団の姿が途切れた。

少し歩いたらまた続きが出るんじゃないかと、必要以上に警戒しながら前進する。

「……完全に途切れたか」

ある程度の距離を進んだところでそう判断した。

大して進んではいけないのだろうが、精神的に疲れ果ててしまったので小休止を挟む。小休止の間にミミック討伐により手に入ったステータスの割り振りと、レベルが上がった分のスキルの割り振りをしておく。

「弱いくせに経験値だけは豊富だな。おかげでだいぶ上がったけど」

普通に進めていたら中盤程度のレベルだろうか。

経験値から逆算したら何匹倒したかわかるな、などと考えながら割り振りを終える。もちろん考えるだけで実際に逆算などしない。

「はあ。さて、こんなしんどいクエストはさつさと終わらせよう」

さほど休憩してないが、先延ばしにしたら心が折れそうなので一氣に行ってしまうことにする。

松明を頼りに洞窟を進んでいく。

何があるかわからないので周囲への警戒を怠らない。

そうしていると、不意に視界が少しだけ揺れた。

嫌な、予感がした。

視線を下に向ける。

足を乗せる前までほんの少し飛び出していた石が、今は逆に地面に沈んでいる。

現状を確認すると同時に、後ろで何か重たい物が落ちるような音が響いた。それも結構な音量でだ。

僕は恐る恐る振り返る。

松明の照らしている範囲にこれといった異常は見えない。見えないのだが、異常は別のところから、はつきりと確認できた。

音がするのだ。

何か大きな物が転がってくるような音が。当たり前のようにこちらに近づいて来ている。

僕は迷わず走り出した。

この状況なら後ろから何が来ているか考えるまでもない。

「くそ！なんてベタな！」

そう言わずにはいられなかった。

そのベタな罠に引っ掛かったことに羞恥を覚えずにはいられない。

やはり僕の操作するキャラが走るよりも速いようだ。

徐々にだが距離を詰められていることが聞こえてくる音から伝わる。

「……っ！」

そうして走って行くうちに、松明の照らす範囲にそれは出現した。

「……こんなっ！」

視界に入った物は、通路を埋め尽くすほどの巨大な岩だった。やはり思った通りだった。

「こんなベタな罠で死んでたまるかあああああ！！！」

僕は思わず叫んでしまった。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

4日も放置してしまった・・・。

一 二 三 目の試練 (3) (前書き)

べ、べつに某映画を見た訳じゃないんだからねっ！

18話のことで友人に「イン・ジョーズかよ！」と突っ込まれたので・・・。

一つ目の試練 (3)

「逃げ切れなくない!？」

すでにだいぶ距離を詰められているのだが……。どれだけ走っても横道もなければ終着点も見えてきそうにない。

「これはどうすればいいの!？」

走りながら周囲にも注意を払う。

何か見落としたらそこでゲームオーバーになりかねない。とんでもない焦燥感に襲われるが、それでも壁や床、天井に至るまで視線を巡らせる。しかし何も見つかりそうにない。岩はもう背後まで迫っている。

「詰んだか……」

僕が諦めてそう呟くと同時に、僕のキャラに岩が衝突した。

「はあ、ゲームオーバーか……」

思わずため息が漏れる。

いくらなんでもこれは酷いんじゃないだろうか……。出口のない迷路に放り込まれるようなものだ。

「そういえば罰ゲームみたいなものがあるって言ってたっけ……」

こんな理不尽なクエストで更に罰則があるというのだから堪らない。目の前で画面が暗転する。

『これは完全に詰んだな』

そう思い、もう一度溜息を吐いた。

「…………あれ？」

暗転から回復すると、ゲームオーバーなどではなく普通にムービーが始まった。

薄暗い洞窟の中を、僕が操作していたと思われる魔法使いが駆けて行く。その背後には地響きを上げながら迫ってくる巨大な岩がある。

「はあ……。はあ……。くそっ！このままでは……！…………ん？」

魔法使いが何かに気が付き、画面が正面に流れて行く。進路の先には十字路が待ち構えていた。

「…………」

言葉がでない。

陳腐な動画が終わり元の画面に戻る。進行方向にはいつの間にか十字路が出来ていた。

更に接触したはずの岩との距離もだいぶ開いていた。

変な遊び心も大概にしとけよと思わずにはいられない。完全に脱力したが、僕は気を取り直すと十字路を見る。

後ろには下がれないので、選択肢は3つ。このまま岩との追いかかけが続く正面の道、どうなるかわからない左右の道、少し離れたとはいえあまり考える時間は与えられていない。

少し迷ったが、腹をくくると十字路へと駆けだした。

一つ目の試練（４）

十字路に辿り着く直前、視界の端に何かが映った。思わず足を止めてそちらに目を向ける。

周囲とほとんど同じで見分けが付きにくい、そこには石版が設置されていた。

背後から岩が迫っているので時間はないが、これは設置位置からも十字路に関することだろうとあたりを付け、石版の文字を追って行く。

『勇気と無謀をはき違えるな 誤ればそれは死に直結する 戻ることは許されない 道はすでに黒に染まっている しかし恐れることなかれ 正しき道へは龍が導いてくれるだろう その龍は案内人であり執行人 龍はその者を見極める 欲深き者は龍に見捨てられる 冷酷な者はその爪に 愚か者はその牙に 認められし者は辿り着く 龍の住処へと』

石版にはそれだけが書かれている。

「なるほど……」

謎かけか。

それにしても……。

「龍ね……」

これ以上情報がないようなので十字路へと向かう。

岩はだいたい近くに來てしまっている。どうやら思った以上に時間を食っていたらしい。

十字路を見る。

石版いわく、導いてくれるという龍は周囲に見えない。壁や地面に目を走らせるがどこにも見えない。そうしている内に十字路へと到着する。

『石版に書いてある通りなら……』

「こつちだ!!」

迷わず左の道へ走りこむ。

数秒挟んで、岩が十字路を塞ぐようにその動きを止めた。道を選びなおすことが出来ないようにするためだろう。

『なんだ正面でも追いかけてここが続く訳じゃないのか』
選んだ訳ではないが安堵してしまう。

「……まあ関係ないか。先へ進もう」

僕は前へと歩きだす。

しばらく進むと目の前に扉が現れた。

扉には龍の絵が書かれている。どうやら正解の道を選んだようだ。

「おめでとうございます!」

突如アース君が空中に出現した。

急に出てきたので思わず魔法をぶっ放してしまっただが、効果はないらしく魔法はすり抜けてしまった。すり抜けたのが、何故か腹が立ったので魔法を乱射してみる。やはり効果はなかった。

「石版に書かれていたヒントを見逃さずよく辿りつけました！」

そう言いながら不気味顔が至近距離で笑っている。

気持ち悪いので離れてほしい。

「あなたにはわかりきったことでしょうが、『戻ることは許されない道は黒に染まっている』というのは五行説でいうところの北を表します。そして『龍』とは五行説で東方を表します。つまり進んで来た道を北としたときの東の道ですから、左、今あなたが居られるこの道が正解という訳です」

アース君はどうやら解説のためだけに現れたらしい。いらなくないか？と考えずにはいられない。

「もちろんあなたにはわかっていられたことでしょう。ええ、私にはわかっております。感などでこの場所に立っている訳がありません」

どうやら感を頼りにこの場所に辿り着いた人への嫌味のようなのだ。

……製作者、歪んでるな。

言うだけ言つとアース君は姿を消した。

特に新しい情報があったりする訳ではないようだ。

「これは茜に感謝しないといけないかな……」

これを解くことが出来たのは茜が占いに夢中だった時に、うんざりするほど聞かされた後遺症のようなものだった。おかげですんなり思い出すことが出来た訳だ。

「いいか、茜はどうせ覚えてないだろうし……」

それより今の問題はこの先だろう。

石版を信じるなら、この先に最低でもあと3つは何か罠があると考えられる。

「はあ……。僕も茜みたいにお気楽だったらなあ……」

とても失礼なことを口走りながら目の前の扉を開け放った。

一つ目の試練（5）

舗装された道へ出た。

ここからが本来のダンジョンなのだろう。その割に先が思いやられる罠が仕掛けられていたが……。

立ち止まっただけでも始まらないので、周囲を警戒しながら一本道を進んでいく。洞窟と違い今回はすんなり分岐点に辿り着いた。毎回あんな罠が道に仕掛けられていても困るのだが……。

「ここにも謎かけみたいなのがあるのか？」

周囲を探索してみる。しかし、周囲には何も見当たらない。

『つまりヒントは無しということか。』

二つの通路を見比べる。

「あれ？」

ヒント、というか答えは通路の入口付近にあった。

「右は赤い線が入っていて、左は緑の線か……」

これもまた五行に関することだろう。

確か赤が南で鳥、つまり朱雀を表したはずだ。なら緑が龍なのだろう。青龍というから青色のような気がするが、そこは信号機と一緒なのだろう。

適当な結論に至ると左に向かって歩き出す。
ふと立ち止まって振り返る。

『南を表す印があるということは、岩の罫で南に行った人もここに辿りつけるのだろうか?』

ちよつとした好奇心が湧いた。赤色の道に行ってみたい衝動に駆られる。

「いや、やめところ。下手なことをしたらゲームオーバーになりそうだし……」

後ろ髪を引かれながらもその場を立ち去る。

周囲に目を配りながら歩いて行くと、次の分岐点もすぐに現れた。ここの分岐でもさきほどと同じように通路の入口に色の付いた線が書かれていた。

「ここは緑と黒か」

左が黒で、アース君が言っていたこともあるので北だ。なら右の緑だろう。

僕は迷わず右の道へと進んでいく。

左の道に背を向けた時、背後から水の流れる音が聞こえた気がした。

一つ目の試練（6）

広間にのような場所に出た。警戒しながら周囲に目を走らせる。どうやらモンスターが出てくる気配はないようだ。

広間の中央に、岩に追われていた時と同じ石版が置かれているだけのようだ。

顔を上げて広間内を見渡す。どうやらここでまた問題が出されるようだ。

僕が入って来た道を含めると全部で12、ここは12個もの通路に枝分かれしているようだ。しかし、僕の背後、僕が通って来た道は数に含めなくていいだろう。

『まあそれでも11個の道が残ってるんだけど……』

そう考えながら行き先のヒントが書かれているだろう石版に目を通す。

『後戻りは出来ない 時は正常に回っている そしてこの先への道を知るのは12匹の動物だ』

それだけの文を読み終わると、轟音と共に背後の通路が閉ざされた。

「まさか、これだけ？」

僕は急いで石版を読み直す。しかし、表示されるのは同じものだけだ。

その時、頭上で何かが軋む音がした。そちらへ目を向ける。そこには亀裂が走っており、崩れ落ちて来そうになっている天井部があった。

「しかも時間制限付き!？」

思わず大声を出してしまった。

焦燥感に襲われながらも考えを巡らせる。

「石版を読む前には何も見当たらなかったんだから……」

石版を読んでから起きた変化、つまり背後で閉じた扉へと駆け寄る。扉を調べる。扉の中央部には絵が描かれていた。

「蛇？」

爬虫類のあの蛇だった。

それと同時にまた頭上で音がした。どうやら亀裂が悪化したようだ。

「12匹の動物で、蛇が入ってくるなら……干支？」

また音が響いた。あまり時間は残っていないらしい。

「後ろが蛇だとしたら、対面が猪になるから、時計周りに1時のところか子、2時のところが丑とすると……」

自分の考えを声に出していく。そうしないと、考えをまとめられそうになかった。

「龍の対応する干支は寅と卯。つまり3時のところか4時のところになる」

徐々に頭上からの音の間隔が早まっている。

「どっちだ……」

二つの通路を見比べる。

残念ながら他にヒントとなりそうな物は見当たらない。

「落ち着け。考えろ……」

音は間隔が早まって行き、今ではずっと鳴り続けている。もういつ決壊してもおかしくない。

目を閉じると思考を巡らせる。

『龍……。干支……。蛇……』

今回出されたヒントを思い出していく。ふと、何かが引つかかった。

「……12？」

何か12という数字に、龍に対応するものがあつたような気がする。

「12？時計か？」

しかし、喉元まで来ているのに出てこない。

崩壊の足音はもうすぐそこまで来ている。頭に小石が当たっているようだが、気にしてなどいられない。

「……………思い出した！」

声を張り上げたのが引き金となつたかのように天井が崩れ始めた。僕は慌てて、転がり込むように通路へと走り込む。

轟音と共に広間だけでなく、広間に近い通路までもが崩れて行く。
音が止むと同時に、通路は完全に塞がれてしまっていた。

一つ目の試練（7）

「——つまり、時計で言うなら3時と4時の2択に絞られる訳です」

落石から逃げてしばらく進んだところで、前回と同様に正解の道を選べたらしく、またアース君の解説を受けていた。

「最後にこの2択を見分ける方法として、12に分割されているというのが重要になってきます。

12というのは、先ほどあげたように時計もありますが、それではこの道に辿りつけません」

僕はアース君が姿を現わしてから、当たらないと分かっているが、打撃・魔法を問わず、攻撃を繰り返している。とにかく顔が腹立たしいのだから仕方がない。

「ここではこの12という数字を、更に季節・月になぞらえて考えます。そしてそうした場合、龍の該当するのは春。数字で表すと1〜3。つまり正解の道は1〜3の範囲に当てはまり、なおかつ干支が当てはまる3番目の通路でした！」

説明されなくても正解と言われた時点で僕にはわかりきっていたことだ。だが、そんなことよりも、今は僕の立たされている現状を知った上で、このとおきのおきの笑顔を見せてくれているこのマスコットキャラの顔が憎い。

「解説のためだけにその顔を見せるな！！」

思わずそう怒鳴ると、僕は現状の最強魔法を放つ。もちろんすり抜けるだけで効果はない。そのことが余計に僕のストレスを増やす。新しい情報もよこさないしな！

結局アース君は解説だけすると、煙のようにその姿を消してしまった。

「……次は、次こそは……」

物騒なことを呟きながら次へと向かう。

あのマスコットはプレイヤーの平常心を崩すための、1つの罠なのではないかと疑っている。

「製作会社はなんであれをマスコットとして認めたんだ……」

あんな精神衛生上よろしくない、生理的に不快なマスコットを採用したのか理解できない。

女性ユーザーがあれをただでこのゲームを諦めるというのも、あながち都市伝説ではないのかもしれない。

それにしても……。

「次の場所に出ないな……」

アース君を撒くために全力で走ったりしたのだが、通路が終わる気配がない。

なんとなく、地面に目印としてアイテムを置いてみる。

一方通行なのでここに戻って来れるはずはないのだが……。

またしても訪れた嫌な予感が拭いきれず、足は自然と早くなっている。

—— 1分もかからなかっただろう。

進行方向には僕が先ほど置き去りにしたはずのアイテムがあった。

「無限ループか……」

2度、3度と試してみたが結果は変わらなかった。どうやらこの回廊が次の罠だったらしい。ちなみに、逆走しても同じ場所に戻されてしまった。

それだけ走り回った結果、今回はヒントとなるらしきものは見当たらなかった。

自力だけで突破しろということらしい。

仕方がないので見落としがないかもう1度回ることにした。

壁や床を念入りに調べていく。しかし、結果は変わらず元の場所に戻って来るだけだった。

「どうしろっていうんだ……?」

途方に暮れ、思わず立ち止まってしまふ。ゲームなのだから何かあるのだろうが、皆目見当もつかない。

僕は溜息を吐くと、特に意識せずアイテムを取り出した。

一つ目の試練（8）

「まあ使えないんだろうけど……」

取り出したのはコンパスだった。

やはり使えないのか針が回ってしまっている。溜息を吐き、それでもとコンパスを持ったまま1周してみることにした。

目印のある場所をスタートとして歩き出す。しかし、なんの反応もないままアイテムの見える位置まで来てしまった。

「やっぱり駄目か……」

最初から駄目で元々と割り切っていたのでさほど落胆はしなかった。だが、アイテムを置いた場所から数歩下がった場所、そこで異変は起こった。

「あれ？コンパスが動いてない」

コンパスが動きを止めていた。矢印が北を指している。

その場所から、龍の方角、つまり東となる右側の壁を調べてみる。

見た目には他の壁と大差なかったが、よくよく見ると壁の上の方で不自然に苔が切れている部分があった。

あまりにも変化が小さすぎて気が付けなかったようだ。

「どうにかすれば壁が動くのか？」

とりあえず押してみるかと壁に手をかける。否、かけようと思った。手に壁を触るような手ごたえはなく、体がそのまますり抜けてしまった。体がすり抜けた先には、人が一人やっと通れる程度の小さな

横道が続いていた。

僕はコンパスをしまうと、その狭い道を進んでいく。移動しながらふと思った。

今更だが、こんな現状における最強装備はなんの為に用意されたのだろつかと……。試験的な問題ばかり出されているのに、装備が関わってくるようなものがなかった。

「そろそろ何か出そうだなね。」

なんとなく、そんなことを呟いた。そして、その呟きは見事に的中してしまった。

しばらく歩くと狭い道を抜け、バスケットコート程度の大きさの空間に出た。僕の正面には2足歩行の半人半牛の化け物が斧を持って待ち構えていた。

俗に言うミノタウロスというやつだ。

見た目がやたらリアルで恐ろしい雰囲気纏っているが、それ以上に……。

「なんか、臭そう」

僕の呟きに激怒した訳ではないのだろうが、目の前の化け物は咆哮を上げるとこちらに向かって突進してきた。

咄嗟に横に跳んで回避する。モーションがわかりやすかったので避けることができた。

「動きが速いな」

遅そうに見える目に反して、ミノタウロスは俊敏な動きを見せた。魔法の詠唱時間が固定なことを考えると、魔法使いは動きの速いこいつのような相手とは相性が悪い。どうしようかと考えていると、

ミノタウロスは思ってもみない行動に出た。

魔方阵の出現、つまり敵が魔法を詠唱しているということだ。そんな知能があるようには見えないが、咄嗟のことだったので反応が遅れた。

炎系最弱の魔法だった。

追尾才能は皆無だが、詠唱速度が非常に短い魔法だ。

直径1,5mほどの火球を飛ばすだけの簡単なものだが、こちらの視界を奪うのには十分すぎる大きさだった。

僕はミノタウロスの周囲を回るように火球を回避する。

詠唱速度ゆえか、火球は連続で射出され続ける。

火球の大きさがそこそこあり、魔法使いは移動が前衛職に比べ速くないので、近づくことも出来ない。

魔法を詠唱しようにも、火球が切れないので逃げ回るしかない。同じ動きを繰り返すだけなのだが、ここで大きな違いが出た。

相手は機械が動かしているのでミスはないが、こちらはそう言う訳にもいかなかった。しまった！と思った時には手遅れだった。

操作ミスにより火球に当たってしまう。ダメージ自体はほぼないに等しいものだったが、魔法に当たったことでほんの少しの間だが動きが止まってしまう。

その少しの間が、この戦闘においては致命的な隙となってしまった。先ほどと同じように突進のモーションをする。しかし、こちらは動くことができない。

相手が動き始めた時、ようやく動けるようになったが、遅かった。横に跳ぶが回避しきれず突進に掠めてしまう。

それだけで、ほぼ根こそぎと言っていいほどライフを持っていけなかった。

突進の反動で壁際に吹き飛ばされる。

来る前に回復アイテムは買ったのだが、このままでは底を付くのは時間の問題だった。

「一発が痛すぎる。このふざけた装備でこのダメージって、普通の装備じゃ一撃も耐えられないってことか」

反動で距離が開いたからか、火球が当たったときよりも長時間止まったにも関わらず、突進はされなかった。

恐らくこのままやつても勝ち目はないのだろうと思う。

ミノタウロスの背後に視線をやる。

そこには重そうな扉が鎮座している。

「火球を回避しながらあそこまで行くしかないか」

かなり厳しいことになりそうだが、即座に覚悟を決めて行動を開始した。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

ここ数日は廃人になっていたので更新が遅くなりました。申し訳ないです……。

一つ目の試練（9）

正面から火球3つ、それに火球を隠れ蓑のに右からの突進。

『横軸での回避は突進が避けられないっ！』

瞬時にそう判断すると、火球に向かって飛び込んでいく。

1つ目を腰を沈めることで回避する。そこへ合わせるかのように2つ目の火球が飛んで来ている。それは体を少し捻ることなどでなんとか避ける。

無茶な避け方をした為に体勢が崩れる。そこへ最後の火球が飛んで来た。顔面直撃コースのそれを、体を丸めるように前転する形で避けることができた。

「まだあいつが来てないっ……！」

僕は前転の勢いを殺さず、そのまま立ち上がって前方に向かって跳ぶ。そこへ、すぐ後ろを掠めるように巨体を通り過ぎた。

一瞬でも迷っていたら当たってしまっていただろう。

ミノタウロスが体勢を整える前に反対側の出口へとたどり着いた。この空間だけで何回死ぬと思ったかわからない。

ミノタウロスへと目を向ける。ミノタウロスはちょうどこちらへ向き直ったところだった。

——そんな確認などせず、即座に逃げておくべきだった。

「……か、火球が来るので可及的速やかに逃げましょう。なんて……」

親父ギャグを言ってしまうほど動揺する。

そこには、思わず見入ってしまうほどの大量の火球が、ミノタウロスを中心に数十、数百と浮いていた。

世界が止まったのではないかと思うような沈黙が降りる。

実際には1秒にも満たない時間だったのだろうが、僕にはその静寂が数時間にも感じられた。

静寂を打ち破るように、ミノタウロスが咆哮する。

それに示し合わせるかのように、大量の火球がこちらに向かって飛んできた。

「うわああああああ!!」

絶叫すると通路に向かって駆け込んでいく。

どんな罠があるかわからないが、足元を確認しながら慎重に進んでいられるような状況ではなかった。

正直、後ろを確認する余裕もない。

逃げながら、ふと思い出したことがある。

「ミノタウロスが出てくるのって確か」

そこまで考えたところで、目の前にT字路が現れた。

正面の壁には何か紙のようなものが張り付いている。また何かの暗号だろうかとそれを調べてみる。

それは暗号ではなく、どうやらこの先にある広大な地下迷宮の地図だった。

確認しようと地図を広げたところで、背中に嫌な気配がした為に左側へ全力で跳ぶ。悪寒は正しかったようで、先ほどまで僕がいた場所にミノタウロスが突っ込んだ。

爆発でもしたかのような轟音と共に、周囲には砂埃が舞う。

何が来たかなど確認するまでもない。

走り出しながら地図を確認する。地図の出口から逆に辿って行く。

結論として、幅が3mもないこの通路で、ミノタウロスと交差する必要があるということだった。

一つ目の試練（10）

牛の姿をした化け物と対峙する。
背後には壁、すなわち逃げ道はない。

「剣士だったら……」

無駄と悟りながらもそう呟かずにはいられない。

魔法使いは数ある職業の中で、職補正により最低の移動速度を誇るのだ。それに対して、自分のメインである剣士は、ベスト3に入る程の移動速度がある。そのため移動速度の差に、どうしても違和感がある。

些細なミスが即致命傷に繋がる現状では、それが大きな問題となっ
てしまっている。

魔法はどれだけステータスが高くとも、詠唱が固定なので意味がない。

現状であれば、威力は低いが、隙が少なく素早い剣士と、威力は高いが隙だらけで鈍足な魔法使いでは、比べるまでもなく剣士が正しいのがわかってもらえると思う。ついでに言うなら、魔法使いは始めただけで操作に慣れていない。

「こんな条件で敵の背後に回れって？」

……うん。無理だ！

「せめて物理攻撃で来てくれたら可能性が……」

そんな内心を反映してくれたかのように、ミノタウロスは魔法の詠唱を始めた。

「AI（人工知能）のばかーーーー！！」

僕も咄嗟に魔法を選択、詠唱を開始。しかし、もちろん相手の詠唱の方が早く、すでに何度も見た火球が空中に浮いている。しかも5つ。

「くそっ！間に合うか……！」

火球がこちらめがけて飛ばされる。

ミノタウロスは、これで終わりとはかりに次への行動を見せていない。所詮AIなのでそんな訳がないのだが、見ていて非常に腹が立つ。

僕が詠唱していた魔法もそこまで詠唱時間が長くないものだったおかげで、火球が僕とミノタウロスの中心に来た辺りで発動することが出来た。

僕の立っている位置から数十cm先に通路を塞ぐような形で水の壁が出現した。

対遠距離攻撃魔法だ。

防げるかわからないが、何もないよりマシだろう。

魔法を展開した直後、火球が水の壁に激突する。

「うっ！」

3つ目までは打ち消すことが出来たが、そこで水の壁は消滅、残りの2つは素通りしてきた。

横跳んで回避しようとするが壁に激突し、1つが避けきることができずに当たってしまふ。

およそ体力の半分を奪っていった。

一瞬視界から離れたミノタウロスに目を向けると、視界に移ったのは突進の姿勢を取っているミノタウロスの姿だった。

驚愕と共に、逆側へと跳ぶ。

ミノタウロスの足元で小さな砂埃が舞い、視界からその姿が消えた。

反射だった。

これは当たったな。そう思った時には体が動いていた。

魔法使いではなく、キャロルと一緒に狩りをしてきた剣士としての動きだった。

武器を振りかぶり、軸足を中心として体ごと回る。敵の体を剣で受け、受け流しながら敵を切りつける。今回は杖なので切りつけるではないが……。

補助職であり、スキルやステータスをそういう型に特化しているにも関わらず、最前線で戦い転がる（瀕死状態になること）キャロルのおかげで身に付いたPSだ。プレイヤースキル

魔法使いでも出来るとは思わなかったが、イケたらしい。

「ん？おお？」

おそらくやった本人が一番驚いただろう。

「……とりあえず」

驚きで一瞬停止してしまったが、成功して生きているならやることは一つだけだ。

「逃げるが勝ち!!」

僕は牛野郎が態勢を立て直す前に、背を向けて全力で駆け出した。どうやらミノタウロスは足が遅いらしく、魔法使いに追いつくことができないので、このまま走れば追いつかれることはないだろう。

「はあゝ。しんどかった」

僕はため息と弱音を同時に吐くと、迷宮を駆け抜けていく。

一つ目の試練 (10) (後書き)

次で一つ目の試練を終わらせようと思います。
今までと違い急激に文字数が増えるかと思いますがご了承ください。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

すいません。遅くなりました。

一つ目の試練（11）

「あと少しで出口だな」

地図を確認しながら迷宮を走り抜ける。

ミノタウロスとはかなりの距離が開いている。

追いつかれることはないだろう。

偶に火球が飛んでくるが、遠距離からの直線攻撃に当たってやるほど僕のPSは低くない。

「よし！あとは直線だけだ！」

『コ』の字型の折り返し地点を過ぎたら後は直線だけになる。

つまり火球にさえ気を付けてさえいれば追いつかれることはないということだ。

『これで逃げ切れたな』

安堵と共に折り返し地点にたどり着いた。

後ろを振り返る。しかし、そこに先ほどまでいたはずのミノタウロスは見えない。

『諦めたのか？』

疑問に思いながらも立ち止まることはしない。

そんなことをして追いつかれたのでは笑い話にもならない。

「まあ、来ない分には構わないか」

あんなのと一々やりあつてられないしな。などと思考を放棄した。

「ん？今、何か聞こえたような……」

ふと、BGMに混ざって、何か違う音が聞こえたような気がした。

『気のせいかな？』そう考えるのだが、何か嫌な予感がしている。前に進むにつれ、背筋に走る悪寒が酷くなっていく。変な汗まで噴き出してくる始末だ。

音は前へ進むほど大きくなっており、それが断続的に響いているものだとわかる。

そう、例えるなら、何か大きな生き物が、体当たりでもしているような……。

その時、前方5m程の壁が爆撃でも食らったかのように吹き飛んだ。勢いが付き過ぎたらしく、反対側の壁に激突した。壁が大きく窪み、粉塵の中からこの事態を引き起こした張本人が姿を見せる。

それはもちろん後ろから追いかけていたはずのミノタウロスだった。

「……嘘だろ？」

あまりの出来事に思考停止に陥っていた僕は、ミノタウロスから火球が放たれるまで動きが止まってしまった。

「っ！」

迫る火球を体を捻ることで回避する。

追撃の火球はなかったが、お約束ともいえる突進の態勢をとっている。それに対して、僕は無理な回避で完全にバランスを崩してしまっている。

避けるのは不可能と判断する。それならばと、敵を凝視する。どうせ当たれば即死なのだ。

「同じ死ぬなら足掻けるだけ足掻く！」

覚悟を決めると、場の状況を冷静に見れるようになった。

正面でミノタウロスが地面を蹴る。爆発音と共に足元に砂塵が舞う。まだ体勢は崩れたままだ。

ミノタウロスが高速で突っ込んでくる。距離はすでに半分ほどまで詰められている。

ここまでで約3秒。

ここに来てやっと体勢を立て直す、すでに回避が間に合わない。袋小路で使ったすり抜けも、近すぎて無理な距離だ。動きが遅い魔法使いじゃなければ出来たかもしれないが……。

ミノタウロスと接触する直前、背後に向かって跳躍する。勢いを殺す為の最終手段で、ダメージは免れない拳句、効果があるのかもわからない大博打だった。

ついでとばかりに、ミノタウロスが接触する直前、杖を思い切り振りおろす。

狙いは肉の付きようがない目だ。

眼球を抉るつもりで杖の先端を打ち込んでやる。開き直ったのが幸いしたのか、完璧なタイミングで目に突き刺さった。直後、体当たりの衝撃を受け後方に吹き飛ばされる。死も覚悟していたのだが、半分程度減っただけで済んでいた。

「……いくらなんでもダメージ少なすぎじゃないか？」

とりあえず回復アイテムを使いつつ起き上がる。

前方ではミノタウロスが咆哮をあげている。

目を突き刺した時、痙攣したような動きがあったのでおそらくそのせいだろうと適当に考え、それ以上は思考を放棄した。

ミノタウロスは未だに攻撃体勢を取っていない。

このタイミングを逃したら次の攻撃する機会はいつになるか……。

「あの牛野郎はここで沈める！」

魔法の選択を開始。

相手の属性は常用魔法から火属性と仮定、火に対して最も効率のいい属性は水だ。現在覚えている魔法の中で最強の水魔法を指定、詠唱時間は5秒、魔法の詠唱を開始する。

正面でミノタウロスがこちらを視認した。どうやら痛みから立ち直つたらしい。

魔法の詠唱を確認、なんとかの一つ覚えのように火球が出現する。

魔法の完成はもちろんあちらの方が早い。

普通のゲームだったらここで詠唱妨害されて負けてしまっただろう。しかし、ここはアースという『普通』とはかけ離れたクオリティのゲームだ。

アースでは傷ついた場所によって様々なマイナス効果が付いてしまう。そして、正面の牛野郎は先ほど目を負傷した。

目を負傷すると視界が狭くなり、遠距離攻撃（物理・魔法問わず）の命中率が大幅に下がる。それどころか掠りもしなくなる。

下手な鉄砲も数撃ちや当たるというが、アースでは決して当たらない。マイナス補正の効果があまりにも鬼畜なのだ。

ユーザーから不満の声が過去に何度も上がったが、『仕様です』の一点張りで変わる気配はない。

僕も掠っただけで戦況がひっくり返るこの仕様は好きじゃなかった側だが、今回はその仕様に助けられる形となった。

ミノタウロスが火球を放つ。もちろん鬼畜補正のおかげで火球は見当違いの場所に飛んでいく。ミノタウロスは再度火球の詠唱を始めるが、その詠唱が終わるより先にこちらの詠唱が完了する。

突如として通路を覆い隠すほどの水が出現、大量の水は激流となつてミノタウロスに襲いかかる。ミノタウロスから火球放たれるが、

川に松明を放り込むようなもので、火球は一瞬でかき消されてしまう。ミノタウロスはどうすることも出来ず、そのまま激流に飲み込まれた。

「……はあ。かなりきつかったな」

体中から嫌な汗が噴き出している。

当たらないとわかっていても、火球が放たれる直前は心臓が止まるかと思った。

ミノタウロスとの戦闘振り返ると、色々と思うところはあるが……。

「……結果オーライってことで」

人生前向きが一番と気を取り直して迷宮の出口へと足を運んだ。

大きな扉の前で歩みを止める。

扉には鍵がかかっており、扉の中央に鍵穴が付いている。

僕は先ほどミノタウロスを撃破した場所で拾った鍵を差し込む。どうやらミノタウロスを撃破するとその場に落ちたようだった。

拾った鍵は引つかかることなく、すんなりと解錠することができた。

『最初からミノタウロスを避けたら進めなかったという訳か……』

正直なところ全く倒せる気がしなかったので、なんとかここまで逃げてしまっていたら、恐らく取り乱して負けてしまっていただろう。扉を開ける。

薄ぼんやりとしか見えないが、通路ではなくどこぞの球場並みの開けた空間に出たようだ。

畏の心配もしたが、これほどの空間なら畏よりモンスターの群れだろうと開き直る。

ほとんど警戒もせずに歩みを進める。

広大な空間を3分の1程進んだところで？それ？は起こった。

「なんだっ！？」

なんの前触れもなく、地響きと共に中央の地面が隆起し始めたのだ。突然の地響きに立っていることが出来ず地面に伏せる。そうしていると、地面が割れ、そこから植物の根が飛び出してくる。根は天井に向かって伸び、そこからある形を紡ぎだしていく。

「……龍」

地響きが止まると、そこには空間の半分を占める巨大な龍が鎮座していた。

根から変化したにも関わらず、その体は透き通ったエメラルドのような輝きを放っている。

予想外の出来ごとに、立ち上がることも忘れ、現れた龍を見つめることしか出来ない。

『強き者よ』

「っ！？」

咄嗟に飛び起きると、いつでも魔法を放てる状態で待機する。

いつ戦闘が始まってもおかしくない状況だったというのに、動きを止めてしまったことが恥ずかしくなる。

僕は緊張状態を維持しながら龍の言葉に耳を傾ける。

『汝、我を持ちて西へ向かえ』

それだけ言うと、龍の体が発光しだした。途轍もない光量に目を開けていられず手で遮る。

少し経って光が収まると、そこに龍はおらず、静寂だけが残されていた。

「なんだったんだ？」

戦闘にならず若干拍子抜けした。

何か変わったことがないかと周囲を探すが、奥に出口と思しき光源が見えるだけだ。

「??？」

これだけなのかとため息を吐いた時、それに気が付いた。

右手の薬指、そこには緑色の龍が描かれた指輪が嵌められていた。材質は鉄だろうか。鈍く輝いている。

「よくわからないけど、これを持って西に行けばいいの？」

情報が足りずわからないことだらけだが、なるようにしかならないかと開き直り、出口らしき光源へと歩き出した。

一 つ目の試練 (11) (後書き)

最後が変になったような気がします……。感想を頂けると喜びます。

第六感（前書き）

第2章的な部分になります

第六感

ホームルーム前の短い時間、教室の一角にいつものメンバーで集まっている。いつものメンバーとはもちろん僕、茜、大助、真樹、衛の5人だ。しかし、その場に流れている空気は決して和やかなものではない。剣呑ともいえる雰囲気だ。

「……それで、衛、どっちだったんだ？」

「さつさと教えなさい」

「あきちゃん……なんかあの2人が怖いよー……」

「黙っていよう茜。巻き添えにされたら嫌だし」

「待て！ 晃、俺を見捨てないでくれ！」

衛に詰め寄る2人に目を向ける。何か鬼気迫るものがある。とても怖い。

衛が何かにすぎるようにこちらを向いている。僕は衛から視線を逸らしながら、眉根を寄せて目を伏せる。

「……ごめん」

「晃あああー！！！！」

衛は絶叫しながらこちらに手を伸ばす。茜は半拳動不審になりながら、僕と伸ばされた衛の手を交互に見ている。茜の肩を叩くと、茜は困ったようにこちらに目を向ける。僕の方が身長が高いため自然と上目使いになっている。……ちよつとかわいい。

内に湧いた雑念を追い払うのも兼ねて、ゆつくりと首を振る。

茜はもう一度助けを求めている衛に目を向けると、顔を伏せて両手で顔を覆った。ついでに、僕も悔しそうな顔をして俯く。

「衛。いい加減諦めたらどうだ」

「あなたに味方はいないのよ」

それを見届けると、真樹と大助が止めの言葉を投げかけた。

衛は絶望を顔に張り付けたまま、伸ばしていた手を下す。僕と茜からの援護はないと悟ったのか、衛はついに顔を伏せる。

「……っしょう。ちくしょー！！！！」

そして絶叫した。

皆、ノリノリである。

「で、衛。結局どっちなの？」

いい加減に恥ずかしくなってきたので、教室中の視線を欲しいままにしているくだらない寸劇を切り上げる。

僕が切り上げる意思を見せたことで、全員が何事もなかったかのようになに僕の席に集まってくる。

ことの発端は、衛が本日未明に『職員室で転校生らしき人物を見かけた』というところから始まったのだった。

そこから大助が性別はどっちかと尋ねたところ、衛がはぐらかしたので先ほどの流れになった訳である。

「女だったな。しかも、かなりの美形だったぜ」

その言葉を聞いた大助、それと聞き耳を立てていたクラスの男共が歓声上がる。

逆に女性陣からの反応はよろしくない。やはり異性に来る方がいいのだらう。恋人がいる者などあからさまに顔をしかめている。

「美人か」。それじゃあきつとアースはやってないだろうなあ」

かなりずれた僕の評価を聞いた友人達の反応は様々だった。

「晃！？判断基準そこなのか！？」

「さすがあきら！言うことが違う！」

「茜。良かったじゃない」

「？真樹？良かったって何のこと？」

茜は真樹の発言に首をかしげている。僕もなぜそこでその台詞が出たのか考えを巡らせる。

『……そうか、茜はそっち趣味だったのか』

仲がいい幼馴染の女の子、僕の中でそういう位置づけにいる茜だが、過去に浮いた話の一つも聞いたことがない。

運動するための遺伝子は大助に流れてしまったので仕方がないと思っ
っている。

目は大きくてかわいらしく、手入れの行き届いた絹を思わせるさわ
り心地の良いブラウンの髪は肩口で切りそろえられており、僕や大
助の後を半歩下がって雛鳥のように付いてくる様は大変庇護欲をか
りたてられる。容姿も全体的に童顔なので効果抜群だ。個人的には
学年どころか学校で1・2を争う綺麗所だ（というよりはかわいだろっ）と思うのだ。

今までどうしてそういった話題が出ないのだろうと不思議に思っ
ていたが、なるほど、それでは浮いた話など出てこないだろう。

女性からのやつかみも聞こえてこないしな。

僕は変に納得してしまい、腕を組んで頷いている。

「あきちゃん？どうかしたのー？」

「……なあ大助」

「……言うな」

「……あれは勘違いしてるわね」

「俺もそう思うぞ」

「何も言うな。あきらに期待するほうが間違ってる」

「「それもそうだ^ね」」

「皆してどうしたのー？」

3人は俗に言う？天然？に当たる茜に目を向ける。

眉根を寄せて頭に疑問符を浮かべ、かわいらしく首を傾げている茜。3人共に盛大なため息を吐く。そして、未だに現実に戻ってこない？朴念仁？に目を向ける。またしても盛大にため息を吐いた。

「駄目ね」

「ああ、駄目だな」

「我が妹ながら情けない……」

「むー。なんか馬鹿にされてるよー」

「これは進展しそうにないぞ？」

「無理矢理にでもくつつけてみる？」

「無駄だな。その程度で済むなら俺が手を打ってる」

「ねー！なんのことー？」

「はいはい。茜はあそこでトリップしてる晃君を連れ戻してきてね
ー」

3人に適当にあしらわれ、茜はふくれっ面で晃の元へと向かった。茜が晃に声をかけると、晃は茜の肩に手を置きうんうんと頷いている。もちろん茜は疑問符を浮かべて首を傾げている。

「……素直ないいい子なんだけどねえ」

「兄である俺が言うのもなんだが、かなりの美形だしな」

「しかし、2人とも鈍いな」

「本人もわかってないってのもねえ」

「何気にスタイルもいいんだぜ？」

「晃は妹だと思ってる節もあるしなあ」

3人は揃って視線を移す。

「……」

視線の先には、仲睦まじくずれたコントを始めた2人がいる。

「やっぱり駄目ね」

「そうだな」

「これで転校生に晃が惚れたりしてな」

「晃君に限って、それはないわね」

「そうだな。あきらにはないな」

「いやいや、転校生がアースやってたらわからないぜ？」

「……」

「……すまん。俺が悪かった」

大助と真樹から責めるような視線を向けられ、即座に謝る衛。

「……否定出来ないところが怖いわね」

「むしろあきらなら……とさえ思うな」

「そういえば、ちょっと前にアースで遊んでる人がどうか……」

「……」

「……いや、すまん。本当に俺が悪かった」

大助と真樹から汚物を見るような視線を向けられ、低頭して謝る衛。茜と晃はバカップルも真青のスキンシップを取っている。言葉にするのも憚られるレベルだ。

「……あれで付き合ってたのよね」

「……ああ、少なくとも本人達にそのつもりはない」

「あれで付き合ってたないなら、そこらのカップルなんて肩を叩いたようなもんじゃ……」

「……」

「……私が悪かったと、反省しております」

大助と真樹から汚物に巢食う親が蠅である幼虫を見るような視線を向けられ、土下座して謝る衛。

茜と晃にはすでに視線を向けられない。クラスの中には^{あて}惚気られて教室から逃げ出す者までいる。

「……空間がピンク色なだけで」

「……安心しろ。気のせいだ」

「これで転校生と付き合い始めたら浮気じゃ……」

「……」

大助と真樹から殺気混じりの視線を向けられ、土下座を飛び越え土下寝に移行する衛。

一周して落ち着いたらしい2人は和やかに会話している。

「……」

無言で視線を2人に向ける。

どこか幸せそうな茜と、至って普通の顔をしている晃。ついでに茜は頬を薄らと桃色に染めている。

「なんで気がつかないのかしらね？」

「あきらく、茜だからだろ？」

「俺は晃が転校生に惚れないことを祈ってる……」

「大丈夫でしょう？……例の相方の人じゃなければ」

「そうだな。あきらに限ってそれはねえよ。……この前言ってた人じゃなければ」

「俺は嫌な予感が肌に突き刺さってるんだけど……」

「……」

「いたっ！ちょ！叩かないでくれよ！いや、だからって蹴りは！」

大助と真樹は無言で暴力を振るい始める。目にはなんの感情も移していない。衛は蹲るように暴力に耐える。
茜と晃は不思議そうにその光景を見ている。

「俺の記憶が正しければ、お前の第六感は的中率がかなり高いんだがな？」

「私の中では的中率十割なんだけど？」

「あいたっ！っていうかそれ俺のせい！？俺のせいになるの！？」

「真樹、どうする？」

「埋めるわ」

「埋められるの！？」

「でも転校生はもう来てるんだよな……」

「大丈夫よ。ただの腹いせだから」

「俺は何にも大丈夫じゃないですよね！？」

「どうする？もういつチャイムがなつてもおかしくないぞ」

「……さすがにもう無理ね。違うことを祈るしかないわよ」

「俺のせいじゃないのに……」

焦りを顔に浮かべる大助と真樹、しかし、無情にもチャイムが鳴り響いた。

衛は先生が教室に入ってくるまで打ちひしがれていたという。

第六感（後書き）

日常会話なら結構さくさく進むのですが……。更新頻度を少し上げるように頑張ります。

転校生

視線が集まる中、教壇側の扉が開き、その人物が姿を現した。

金髪碧眼、交じりつけ無しの眩いばかりの金色、腰まで伸びる髪の毛は枝毛などとは無縁に見える。スカイブルーの瞳は、その瞳を見た者全てを魅了しかねないほどに澄んでいる。

容姿に至っては100人見れば100人とも、美人だと間違いなく答えるはずだ。女神の生まれ変わりと言われても信じるだろう。

身長は160cm前半くらい。すらりとした体型だが、決して痩せているとは思わせない。出るところはしっかりと出ており、かといって大きすぎるという訳でもない。手足も長く、その肌は陶器のような白さをしているが、不健康などと言う訳ではない。一部は薄らと桃色に染まっている。それが倒錯的な美しさを生み出し、異性だけでなく同性さえも魅了している。

見知らぬ集団の前だというのに足取りはしつかりとしており気品すら窺わせる。上品な仕草は時に、周囲を威嚇することもあるが、目の前の女性からはそういったことは感じられない。それどころかどこか親しみやすい雰囲気がある。同年代でありながら女の子というより女性と言ったほうがしっくりくるのだから不思議だ。

クラス中が魅了されてしまったかのように静まり返る中、教壇に立った女性は自己紹介の為に口を開く。

「初めまして、キャロライン・レクシアと言います。呼びにくいと思うのでキャロルと読んでください。日本に来て日が浅いので、友達もおりません。どうか仲良くしてくださいね？よろしく願います」

歌わせたらすぐに歌姫と呼ばれそうな、凜とした美声で自己紹介をした。話すペースや大きさが非常に聞き取りやすく、日本語の発

音まで完璧だった。ここまで来ると一種の芸術だ。

最後の『よろしく願います』の所では、完璧な角度で一礼までしてみせた。その際に長く綺麗な髪が前に流れてきたのだが、それを見た数人が感動のためか失神するという事態にまで至った。まあ、鼻血を噴いてしまったやつよりはマシと言えるだろう。

キャラルが自己紹介を終えると、一拍置いて教室内に怒号が響き渡った。『結婚してください！』だの『惚れました！付き合ってください！』だの『お姉様って呼んでいいですか！？』だの、キャラルが姿を見せた辺りから、こうなることをある程度予想していた僕は、安眠用マル秘アイテム【耳栓】を装着したのだが、それすらも貫通して音の暴力に晒されていた。

思わず顔をしかめてしまう。

キャラルはこの爆音に晒されながらも、笑顔で手を振ったりしている。

現学園のアイドルともいえる茜も例に漏れず、うつとりとした表情でキャラルに熱い視線（兎主観）を注いでいる。

周囲を見渡すと少し離れた場所で、衛が立ち上がって何かを叫んでいたが、隣に座っている真樹に打ちのめされていた。大方、スリ―サイズがどうか言ったのだろう。こういうことに関しては恐ろしく勇敢な友人に溜息を吐くと教壇で微笑んでいるキャラルに目を向けた。

とんでもなく綺麗だと思う。ただ、僕としては綺麗過ぎて逆にドン引きである。あんな美人に隣を歩かれたらいたたまれずに逃走してしまうだろう。

ヘタレは大人しく無関係を装うことにしよう。

もしかしたらアースの相方であるキャラルかもしれないが、向こうは僕に気が付くことはないと思うので黙っていることにする。僕はゲームの中でだけキャラルと遊べばいいのだ。

落ち着く気配のない教室をしり目に、1時間目は寝ても平気だったなあと睡眠を取ることにした。

寝る態勢に入る直前、キャロルと視線が合ったような気がするが、自意識過剰から来る勘違いだろうと思い、そのまま睡眠学習へと移行した。耳栓が刺さったままなので、授業中は何も聞こえなくなるのだろう。『睡眠学習にならなくね?』とか聞こえないのである。

「茜ー。1時間目が終わったら起こしてー」

恐らく聞こえていないだろうが、まあ何も言わなくても起こしてもらえろ。

真面目な茜はずっと起きているし、僕が寝る授業を心得ている。運動はからっきしだが、こういう時には役に立つ幼馴染である。

そのまま、僕の意識はシャットダウンした。

転校生（後書き）

女性をうまく表現するの『も』苦手なので変な部分があれば教えてください。

昼休み（前書き）

連載のペース上げたいとか言っておきながら、結局5日放置したのは私です。楽しみにしてくださっている方、本当に申し訳ないです……。

昼休み

「……凄い人だな」

大助が呆れた様に呟く。視線の先には我先にと、転校生に押しかける人の波が出来ていた。彼女の席は中央の最後尾に配置されている。その為、少し離れた位置にある僕と茜の席には被害がない。

現在は昼休み、衛を除くメンバーが集まり、食事を摂りながら事の成り行きを見守っている。転校生について僕はさほど興味がなく茜はあの集団に入っていく勇氣・体力がなく、真樹と大助はめんどくさいので後で衛に聞くそうだ。衛は言うまでもなく最前線にいる。真つ先にスリーサイズを聞いて、一度は女性陣に摘み出されていたようだ……。

「休み時間はクラスメイトだけだったのにな……」

「仕方がないだろ。凄い美人だぜ？男連中が放っておくはずがねえ」

「確かにねえ。あれじゃ嫉妬するのも馬鹿らしいわよ」

「そうだねー」

この事態を引き起こした張本人は人垣が邪魔で見ることが出来ない。というかあの状態で昼食は摂れるのだろうか？

「飯時くらいゆっくりさせてあげればいいのにね」

「無理だろ。一般人が素手で熊とタイマン張るくらい無理だ」

「一般人じゃなくても無理だと思うわよ？」

「熊さんいじめちゃダメだよー」

どうでもいいことを話ながら、今度は視線を廊下へと向ける。廊

下では一体いつ用意したのか、応援団が掲げていそうな旗に「キヤロル様 親衛隊」などと書かれている。廊下から聞こえてくる限りでは既にファンクラブの会員は3ヶタに到達したようだ。恐らく1週間以内に4桁に届くだろう。茜の時がそうだった。そして茜のずれた発言はスルー。

「なんというか、凄いな」

「そうだな」

「ここまでくるとかなり引くわね」

「目がギラギラしてるよー」

茜の言う通り目が血走っている輩が結構いる。見ていてかなり怖い。

「それにしても、二人はよく平気ね？」

たぶん転校生に関してだろう。何しろクラスの男子は僕ら以外全滅している。

「僕には分不相応だからね。なんというか、近寄りがたい」

「俺は単純に興味がない」

「晃君のはわからなくもないけど……。大助の発言は噂の信憑性を上げることになるわね……」

「噂ってどんなのー？」

目を瞑ってうんうん頷く真樹。茜が僕と大助も思っただろうことを聞いてくれたので黙っている。それを正しく理解したのだろう真樹はこちらに視線を向ける。

「……聞かないほうがいいわよ？」

そんな言い方をされたら余計に気になってしまうのが人情である。間違いなく理解しているのだろう。何とも嫌な笑顔を浮かべている。

「そんな聞かれ方されたら余計に気になるよ」

「そうだぜ。あきらの言う通りだ」

「私もあきちゃんに賛成だよー」

それを聞くと真樹の浮かべていた嫌な笑みが更に深いものへと変わった。どうやら、僕らは早まってしまったようだ。まだ聞いていないが、なぜか確信が持てた。

「そう……。そこまで言うのなら教えてあげるわね」

既に聞くのが怖くなっている僕がいる。茜も大助も真樹のなんとも嫌な笑みに気が付いていないのか、僕が見ている限りではなんとも余裕のある態度をとっている。

「なんでも河籐兄妹は晃君を巡って三角関係になっているって噂よ？」

「「「……」」」

言へ葉にできないい……はい。現実逃避終了。

「「「ええええええー！！！！」」」

「3人とも、うるさいわよ。注目集めちゃってるじゃない」

「いや、僕らからしたらそれどころじゃないんですが！」

「そうだぜ！というか俺があきら狙ってるとかおかしいだろ！？どんな発想だよ！」

「そんなことになってたのー？」

「いや、なっていないから！」

無視できないボケかたをした茜に僕と大助が食いつく。脳内でこれを無視したら大変なことになると警告が出てる。

「当事者から事実確認が取れたわね」

「取れてない（ねえ）よ！！」

「困ったねー？」

「本当にね（な）！！」

「男性二人が見せつけてくれてるけど、茜は参加しなくて大丈夫？
晃君取られちゃうわよ？」

「えー。……参加したほうがいいのかなー？」

「するなああああー！！」

僕と大助の絶叫は、昼休み終了のチャイムと重なり、綺麗な三重奏を奏でていたという。

昼休み（後書き）

放課後も、書くべきなのだろうか……。進めるべきか、おとなしくすべきか、そこが問題だ……。感想・評価・誤字脱字ありましたらよろしく願いします。

放課後（前書き）

更新が非常に遅くなりました。申し訳ありませんでした。

放課後

授業終了のチャイムが鳴り響く。担当の先生が授業を切り上げて退室する。それを見届けると、静まり返っていた学校に喧騒が戻ってきた。

「あー……。今日も無事に乗り切ったー」

凝り固まった筋肉をほぐす為に体を伸ばす。体を伸ばすと同時に小気味いい音が鳴る。この後にこれといった予定はないので、帰宅部である僕はおとなしく直帰することにした。どこかに寄ってもいいのだが、残り僅かだった残金は、数日前に茜の胃袋に収まってしまっている。そのために、今はジュース1本買うことが出来ないのだ。そんな僕がどこかに寄り道出来る訳もない。

「僕は直帰するけど、茜はどうする？」

「私もあきちゃんと帰るよー」

「わかった」

茜から確認を取ると、もう一人の幼馴染にも声をかける。これは放課後における僕の日課だ。聞かないと後でうるさいというのもある。

「大助ー。僕らは帰るけど、大助はどうする？」

「そうだなー。今日は体動かすって気分じゃないし、俺も一緒に帰るわ」

「了解。じゃあ帰ろうか」

さっさと鞆に教科書を詰め込むと、2人の帰宅準備を待つ間に教

室の一角へと視線を向ける。

視線の先には、放課後だというのに未だ囲まれている転校生がいた。どうやら興味本位で集まった者から部活の勧誘組みへと変わったようだ。男子部はどうしてもマネージャーとして入部してほしいらしく、もの凄く熱心に勧誘している。見ていてかなり引くものがある。

「あきちゃんお待ちせー」

「あきらー。帰るぞー」

「うん」

短く返事をする2人と教室から離れた。

変わり映えのない道を家に向かって歩く中、3人の話題は本日の一大イベントだった転校生のことが上がる。

「正直、あの人数ばかりはかなり迷惑だと思うんだよね」

「だな。あれだけ集まるとさすがに鬱陶しいだろうな」

「凄い美人さんだったからねー」

「確かに美人だったね。よく覚えてないけど」

「俺も寝て起きたら人数ばかりが出来てたからよく見てねえ」

「2人とも寝てからねー」

「茜は話とかした？」

「してないよー」

「俺ら何気に薄情だな」

「確かに。でも僕はあの人数ばかりに飛び込みたくない」

「俺もー」

「私はどうせ辿り着けないしー」

「茜だしね（な）」

「えへへー」

「茜、照れるところじゃないと思うよ？」

「茜は天然だからしかたねえよ」

「……僕の気のせいかな。今、天然と書いて何て読んだ？」

「はっはっは！」

「そのままじゃないのー？」

転校生と全く話していない僕らは、すぐにいつも通りの馬鹿話に戻っていった。

家に帰ると、これまたいつも通りアースを起動しようとする。

「あれ？」

何故かアースが起動する代わりに臨時メンテナンスの文字が表示される。

「メンテ終了時間は……未定か……。珍しいな。何があっただろ？」

仕方がないので攻略サイトや掲示板の巡回を始めた。

結局その日は日付が変わっても臨時メンテナンスが終わることはなかった。

放課後（後書き）

更新日を決めておかないと、続きをなかなか書かない自信が付きま
した（マテ

という訳で次は土曜日に上げます。

モチベーション維持が大変です（・ω・）

寝不足の理由（前書き）

今夜は麻雀だつてお（＾ω＾）

寝不足の理由

「どうしたんだ？テンション低いぞ？」

衛が不思議そうに尋ねてくる。僕は机に項垂れたまま、顔も上げずに返答する。

「昨日、アースが出来なかったから……」

「それだけで!？」

「晃君。……嘘よね？」

僕はそのまま沈黙する。それをどう捉えたのか、2人がうろたえ始めた。僕が答える気がないと悟ったらしく、同じく沈黙を守っていた茜と大助が補足する。大助はあからさまに呆れたような溜息を吐いている。

「正確には『アースが出来なかったから、暇つぶしに掲示板炎上させて遊んだ。それで気が付いたら深夜の3時を回っていたので寝不足気味』なんだそうだ」

僕はそのまま沈黙を守る。ああ、瞼が重いや……。

「……なんというか」

「……そうね」

「ほっとけば昼までには戻るだろ」

全員が呆れたような溜息を吐くと、僕から視線を外した。茜は会話の内容に付いていけないようで僕にちよっかいを出してくる。正直なところ、今だけは寝かせておいて欲しい。

「茜、やめて……。融ける……」

「あきちゃん融けるのー？」

「うん……。だからやめて……」

突き出される指を払いのけながら茜に抗議の声を上げる。茜は笑いながらもやめる気配を見せてくれない。寝不足で潰れかけている幼馴染を静かに寝かせてあげるといふ選択肢はないようだ……。

「あきら、必死だな……」

「必死過ぎて引くわね」

「晃、残念過ぎるぜっ」

「衛に残念とか言われたら終わりだな」

「晃君……。不憫ね……」

「待て！お前らの評価で俺は一体どういう位置にいるんだ！？」

やたら騒がしい外野では、大助と真樹が無言で視線を合わせると息を揃えてはつきりと言いつつ切った。

「「（頭が）かわいそうなやつ」」

「発言の前に開けた一瞬の間はなんだ！？」

「聞かない方がいいぜ？」

「……世の中にはね。知らない方が幸せっていうこともあるのよ。抹茶アイスの原材料とかね」

「俺の評価は『知らなければ良かった雑学』レベル！？」

相変わらず襲いかかってくる茜の指を撃退しながら、仲のいいクラスメイト達の馬鹿話をなんとはなしに聞いていた。

ふと、なんとなく転校生の席へと目を向ける。そこには昨日と変わらず、大量の人が押し掛けてきていた。むしろ昨日より増えてい

るようだ。正直なところ、教室内に圧迫感があり非常に鬱陶しい。心の中で消えてくれないかなーなどと、発言したら不味い立場になるのが明白な台詞が思い浮かぶ。流石に学校生活がしんどくなりそうなので言ったりはしないが……。

「あ痛っ」

軽く物思いに耽ったせいで、飽きもせず攻撃を繰り返していた茜の指が的中する。よく言えばとても落ち着いた、悪く言えば非常にとろい茜に当てられたことに、ただでさえ寝不足で低いテンションが更に下降した。

「茜」

「なーに？あきちゃん」

もちろんこの間も攻防が繰り返されている。

「愛してるー。だからやめて」

何かが割れるような音（僕の中で）がすると同時に、茜の動きが完全に停止した。計画通り！（人の悪い笑みを浮かべて）よし！これで寝れる！

そのまま落ちていく意識を払い上げようとせず、そのまま落ちるのにまかせて意識を手放した。

寝不足の理由（後書き）

ある程度の頻度で更新していきたい（願望

来週はジャンプやらなんやらが合併でないので、比較的早く更新出来る！……と思います。

自信はありません。

追記：12月14日（月）

ジャンプが合併だと勘違しておりました。

コンビ二にて最新号のジャンプを発見。ただただ驚愕。そして現在、ここに書きこんだことへと羞恥にさらされております。

もしも私のせいで勘違いなされてしまった方、本当に申し訳ありません……。

なんか、もう、うわぁー……。

悲劇（前書き）

更新が非常に停滞して申し訳ありませんでした。

言い訳させてもらうと、引越してから始まり。免許取得、就職、最近では夜勤と激動の数カ月を過ごしていたからなのです。

……… ええ、やろうと思えば更新できましたよね。すいません。興が乗ってしまい、いつもより少し長くなってしまいました。見捨てないで下さった方々へ、どうか今後ともよろしく願います。

悲劇

「んっ!!」

起き上がると同時に体を伸ばす。変な体勢で寝ていたので節々が痛い。体を伸ばした時、背中や腰から破壊音が聞こえたが、まあいつものことなので割愛する。

「……茜、おはよう」

目が覚めたので、とりあえず隣に座っている幼馴染の片割れに挨拶しておく。言っておかないと後がめんどくさいからだ。

「んー……」

家で起きてから登校してくるまでの記憶が曖昧だが、いつも通り学校へ来たんだろうと結論付ける。

何人が弁当を広げているところから、さっき僕を叩き起こしてくれたチャイムは昼休みを告げるものだったのだろう。それならいつも通りのメンバーが集まってくるだろうと考え、覚えがないがきちんとバックに入れてあった弁当を取り出す。

「あれ？ 茜？」

ふと、隣にいる幼馴染の様子がおかしいことに気が付いた。

「おーい。茜」

顔にの前で手を振ってみる。しかし、反応はない。

「……………」

無言で頬を引っ張る。

「んー……………」

まだ引っ張る。

「……………」

限界まで引っ張ったところで数秒停止して様子を窺う。

「駄目だな……………」

しばらく続けてみたが、諦めて手を離す。

「……………本当にどうしたんだ？ 心ここに在らずなんだが……………」

「いや、お前のせいだからな……………」

「おはよう大助。で、何で僕のせい？」

「おはようって……………。まあいい。とりあえず寝る前の台詞を思い出せ。話はそれからだ」

「寝る前……………。……………おやすみ？」

「OK。わかった。何も言わずに1発殴らせてくれ」

「嫌に決まってるじゃない。まったくもう、大助^{バカ}だな（笑）」

「……………なああきら、今俺の名前に何を被せた？ 怒らないから言ってみ？」

「なんのこと？」

「……………まあいい、爆睡する前の台詞は思い出せたか？」

「大助からかって時間稼いだけど駄目だった」

「殴っていいか？殴っていいよな？いや、殴る！！」

「どうしたの大助？虫の居所が悪いみたいだけど」

おまえ
「あきらのせいだろ！！」

「僕が何したって言うの？ただ、大助をからかっただけじゃん」

そう言うで大助は俯き、無言で拳を構える。大助のその動きに合わせて僕は無言で立ち上がる。そして、茜を挟んで対面になるように回り始める。

「あきら。どうして逃げるんだ？」

「あはは。やだなあ。逃げてなんかないってば。そういう大助こそ、その握り拳は何かな？」

「なんとなく握ってるだけだ。あきらは気にしなくていいぜ。ところであきら、立ち止まって見る気はないか？」

「あいにく、なんか動いていたい気分なんだよね」

「そうか」

唐突に大助が立ち止まる。もちろん僕もそれに合わせて立ち止まる。

「どうしたあきら？動いていたい気分じゃなかったのか？」

「ちよつと疲れたから休憩してるんだよ」

「なるほどな」

僕の発言を聞き終えると同時に大助が動き出す。そして、もちろん僕も動き出す。

「
……」

無言で大助が立ち止まる。僕も立ち止まる。

「……」
「……」

今度は無言で動き出す。僕も動き出す。

「……」

移動するペースが上がりは始める。徐々に加速してい徒歩から早歩きへ、ジョギングから全力疾走へ移行していく。

「……くっ」

僕は思わず呻き声を出してしまった。簡単な理由だ。勉強が絶望的だが、運動能力は学校1かもしれない人間と張り合った結果だ。僕のような何をとっても平々凡々とした者が勝てる道理がなかった。

「どうした？息が、上がってる、みたいじゃねえか？」

「そついう、大助こそ、上がり、はじめてるよ？」

「俺は、まだ、余裕あるぜ？」

大助は言葉の通り、余力を残しているようだった。それに比べて僕は息もあがり、全力疾走状態だ。もう長くは持たないだろう。

「立ち止まれば、楽になるぜ？」

むろんそつしたいのだが、笑顔で拳を握り追いかけてくる男がいるのだ。立ち止まれる訳がない。立ち止まったら拳骨が降ってくるのが目に見えているのだから。

「……」

「もう、しゃべる余裕も、ないのか？」

大助の言う通り、僕にはすでにしゃべる余裕がなくなっていた。全力で走り続けている。必死である。

「……その辺にしたらどうかしら？」

「真樹！聞いて、くれよ！あきらの、やつがよ！」

真樹があきましたと言わんばかりの表情で止めに入ってくれる。

……贅沢だとわかつてはいるが、できればもう少し早く止めて欲しかった。

「1から10まで見てたから言われなくてもわかってるわよ。それ

より聞き取りずらいから息を整えてから話してくれない？」

「少し、待ってくれ」

「それにしても晃君、今日はいつもより突っかったわね」

「……」

「しゃべる余裕はなさそうね」

脱力し、床に手を付いて呼吸を整えている僕を見て溜息を吐くと、大助に向き直る。

「大助もそんなむきになって追い回さなくてもいいじゃない。晃君は温室育ちのもやしっ子なのよ？」

「……さらつと凄い毒吐いたな」

数十秒で息を整えた大助が真樹の発言に突っ込む。僕は突っ込める状態にないのでとても助かる。

「事実でしょ？それに最初から聞いていたから、非があるのは晃君だってわかっているしね」

かわいらしく人差し指を立てウィンクしながら『その罰よ』とか言っているが、とても似合っていない。……僕の中で真樹のキャラがぶれた瞬間だった。何しろ軽く引いたほどだ。大助が『ぶはっ！似合わねえ！』と笑い引っ叩かれていたが、まあそれは比較적인つものことだ。

「こほん！それより、晃君の寝る前の台詞よ！！」

わざとらしく咳払いをすると仕切り直しとばかりに話題を変える。間違っではないが、言い訳みたいに聞こえてしまう。おそらく慣れないことをした照れ隠しだろう。突っ込まないのが吉だな。その後、空気の読めない大助が指摘して殴られていたが、どうでもいいので省略する。……『省略できてねえよ！』なんて聞こえない。

「それで、晃君は何を言ったか覚えてるかしら？」

「いや、まったく覚えてないんだよね。登校する前くらいから」

「……………この子、出来るわっ！」

あまりの戦慄に真樹のキャラが完全にぶれたがスル―。というか『この子』で、僕ら同学年ですけど？そしてまた大助が『お前誰だよ！！（爆笑）』と言って（ry

「覚えてないようなら私が教えてあげるわ」

「……………お願いします」

何故敬語になったかって？どっかの**バカ**大助が鬼を召喚したからさ！

「晃君は茜に向かつて『愛してる』って言ったのよ」

「……」

「……………言葉もないようね」

「そりゃそうだろう。忘れてたとはいえ台詞が台詞だ」

「ん？あれ？それだけなの？」

僕の目の前で2人が愕然とする。何故か雷が落ちるような効果音と共に2人の顔が少女漫画チックになったが……………気にしたら負けだろう。

「それだけ、ですって！」

「そんな、まさか」

口元を押さえ頭を振る真樹、その横では頭上を仰ぎ見る大助がいた。上からスポットライトでも当たっていきそうな光景だった。それにしても、……………僕、なんか変なこと言った？

「茜は妹みたいなもんだからね。特別かわいいと思ってるよ」

別段気にすることもなく本音を漏らした。

「かわいいっ!？」

「茜!？どうしたの!？」

「……………そんな、まさか、あり得ないわ!！」

「何が!？真樹の後で雷の落ちる音聞こえるんだけどそっちのがり得くない!？」

「くそっ!俺としたことが!教育課程を間違えただっ!！」

「なんで!？僕は太助に育てられた記憶はないよ!！」

茜が唐突に跳ね起きたが、すぐにその場で放心する。若干さっきよ

り頬が赤いような気がする。

真樹は僕を見ながら世界の終わりのような顔をしている。……失礼な。

大助はなぜかその場で蹲ると地面を叩きはじめた。教育というなら大助が義務教育をやりなおしてくるべきだと思うんだ。

そして何より、聞き耳を立てていたらしいクラスメイト達までもがざわつき始め、次の先生が来ても収集がつかなかった。

このことは昼休みの悲劇として、放課後までに全校生徒に知れ渡る事になった。

悲劇（後書き）

さて、現在2：35なんですが、明日（ていうか今日ですね）は朝から仕事っていうね……。

何やってんだ俺orz

作品に関して。

今回の流れは完全にやってしまったとわかっている。反省はしている。しかし、直す時間もなければ気力もない。よって見直しとか明日帰ってからすることにします。

最後に。

作品に関するご意見・感想・誤字・脱字などあればぜひに！私のやる気に直結します。文とか内容とかくだぐだですが、生温い目で見守ってやってください。

それでは今後ともよろしく願います。

悲劇　くその後　（前書き）

勢いでやった。今は反省している。

悲劇　その後

「いやー、大変だったねー」

「あきらのせいだろ……」

「あきちゃんのせいだったのー？」

「そんなことはないと思うけどな？」

「自覚……無しだと……」

「どうしたの大助？面白い顔して」

「うん。面白い顔になってるねー」

「茜まであきらの味方するのかよ！……いや、茜に期待した俺がバカだったか」

「そうだよ大助。茜は放心状態でどんなだったかわかってないんだからさ」

「なんのことー？」

「まあそうなんだが……。くそっ！真樹がいれば俺の正当性を証明できるのに！」

「え、大助……そんなに委員長のことを……？」

「えー！？そうだったのー！？」

「あきらてめえ！！全部わかってて言ってんじゃねえ！！」

「仲がいいなとは思っていたけど……。そうだったんだね……」

「私もまったく気がつかなかったよー」

「スルーだど！？」

現在僕らは帰路についている。今日は大助も部活に行かずに帰るらしい。というか僕のせいで部活どころではないらしい……。

「大助の好きな人うんぬんはブラジル辺りに置いておくとして」

「置いておくのかよ！！しかも置いておく場所が遠すぎるだろ！！」
「真樹だったんだね」

「まだ言ってるのか！茜はこっちの会話に追いついてこい！！」

「昼休みからちょっと校内の様子がおかしかったね」

「今さら原因が何か言いつてやがる！！」

「びっくりしたよ！。そっかー……真樹かー……」

「茜さん！？まだそこなの！？俺はお前のテンポの遅さにびっくりだよ！！」

「僕、何かしたっけ？」

「あれだけの爆弾発言しておいてわからねえだと！？」

「そういえば、今日は校内が騒がしかったねー」

「遅い！！しかもたった今、現在進行形で俺とあきらが話てるだろうが！！」

「僕は問題発言なんかしてたくない？？」

「かわいいだのなんだの言つてたじゃねえか！！あれが問題発言だつてんだよ！！」

「そんな大声で真樹がかわいいだなんて……。大胆だよ……」

「『かわいい』だけ抜粋したあげく面倒な方向に話を曲げないでくれませんかねえ！？」

「でも茜は普通にかわいいでしょ？ミスコンとかあつたら上位入れる程度には」

「えへへー。あきちゃんに褒められたー」

「あーーーー！！これ以上捌き切れねえ！！」

大助が頭を掻き毟っている。昼休みくらいからずっとこの調子である。体調が悪い訳ではないとのことだけど……。

「大助、本当に大丈夫？なんか変だよ？」

「体調でも悪いのー？」

「体調は悪くないって言つてたよ」

「そっなのー？良かったー」

「でもなんかいつもと違うくない？」

「そうかな？」

「そうだよ」

「あきちゃんが言うならそうだねー」

茜がそういうしながら近寄ってくる。僕は隣に引っ付いてきた茜の頭を撫でてやる。高さといい撫で心地といい僕にとつてとてもやりやすい位置に頭がある。そうしてしばらく頭を撫でてやる。嬉しそうにしてくれるので、こちらとしても楽しくなってくるのだ。

「……………俺、疲れたわ」

しばらく僕らの様子を見ていた大助が、心底疲れたような声を出して脱力していた。こちらまで疲れそうな声色だったのがとても印象的だった。

昼休み某所にて

「い、いま起こったことをありのまま話すぜ！

目の前で『女学生Aを異性として見てません』的な発言をしたと思ったら、そいつがその女学生を突然後ろから抱き締めやがったんだ！！

幻覚も見ただとか幻聴を聞いただなんてちやちなもんじゃあ断じてねえ

何か、もっと恐ろしいものの片鱗を垣間見たぜ！！」

〈某学校某学校M氏談〉

悲劇　くその後（後書き）

感想・評価・誤字・脱字等あればよろしくお願いします。

キャラが暴走気味なんだが、どうしよう……。そして日常パート入るとなかなか終らな（ry

再会

「パスワード……入力っ」と

帰宅早々、自室に引っこむといつも通りアースを起動する。

パスワード入力画面から切り替わると、キャラクター選択画面へと移る。そこには侍とテンプレっぽい魔法使いが表示されている。

「どうせいないだろうけど……」

僕は侍を選択しゲームを開始する。このキャラはキャラルと一緒にプレイすると決めている為、今の時間帯に繋いでも僕が一人で出来ることなどかなり限られてしまうのだが……。

女々しいと、自分でも思っている。それでも、このゲームを始めた直後に知り合った親友と一緒にプレイしたいんだから仕方ない。

「アイテムの補充でもしておこうかな……」

ログアウトしたのが港の近くだった為、露店を廻ろうとキャラクタ―を動かそうとして、唐突に呼び出しがかかった。

「あれ？」

呼び出しは、キャラルからだった。

「……なんでこの時間に接続してるんだろ？」

理由はわからなかったが、呼び出しを断る理由はないので返事を返す。僕の夏休みが明け、中々一緒に遊ぶ機会が減ってしまっていた

のでとても嬉しかった。

「まあ一緒に遊べるならそれでいいか」

思わず口元が綻んでしまったが、それを指摘する人はいないので気にしない。パソコンを見ながら一人でニヤニヤしているさまは、横から見ればさぞかし気持ち悪いことだろう。

キャロルの現在位置は同じ港の反対側辺りだった。前にあのゴキ露店商がいた辺りだろう。

「すぐ行く……っつと」

僕は返信すると同時にキャロルと待ち合わせした場所に向かう。

「ここら辺のはずだけど……」

全力疾走の結果、待ち合わせ場所の付近に到着した。しかし、周囲は人でごった返しているので目的の人物は中々見つけれない。

そう、目的の人物はだ。

僕はキャロルを探すのも忘れ、その一点を穴が開くほど凝視してしまふ。理由は簡単だ。そこだけ何故かぼっかり空間が出来上がっているのだ。さらにその空間には一度見たらトラウマ必須の巨大ゴキ様が鎮座しているのだ。

僕は額から嫌な汗が噴き出しているのを感じた。なんか、徐々にゴキ様が大きくなっていつている気がするのは気のせいだと信じたい。

「こ、これは」

なんだろう何故か前にも似たようなことがあったような……。

「コウ！」

「！？」

ゴキ様に集中していた僕は、突然名前を呼ばれ不覚にも驚いてしまった。

「探しちゃった」

「あ、うん」

そこには再会を待ちわびた友人が立っていた。ほんの数日だというのにしばらく会っていないような錯覚を覚えてしまう。

「それにしても、相変わらず凄い人混みだね」

「そうだね」

「あんまりわらわら多いと消し飛ばしたくならない？」

「え、えらい物騒だね……」

「そう？普通じゃない？」

「それが普通とか洒落にならないんですが……」

久しぶりに会って早々に周囲に毒を撒き始めた相方にあきれると同時に、会えたことによる嬉しさがこみ上げてきた。

「キャロル」

「何？」

「……久しぶり」

この時、僕は画面を見ながら笑っていたと思う。だって、本当に嬉しかったから。

「うん。久しぶりだね。コウ、会えて嬉しいよ。」

そう言われると同時に顔が熱を持ったような気がした。この手の台詞を面と向かって言われると、かなり恥ずかしいものがあるな。

……まあいい。そんなことはとりあえず置いておくとしよう。そろそろ、そろそろいいだろう。会話を始めた辺りからすごく気になっ
てはいたんだ。だけど、とりあえず久しぶりに会ったからと、我慢していたんだ。突っ込みたい衝動にかられながらも必死に我慢していたんだよ。

……ふう。よし。言うよ？言うからね？

「……ところでキャラルさん」

「どうしたの？急に改まって。しかも『さん』とか付けてるし」

「まあまあ、そんなことはどうでもいいじゃないですか」

「なに？ホントにどうしたの？何か悪いものでも食べた？」

「食べてません。そんなことは置いておいて」

「置いとくんだ」

キャラルの発言はきりがないのでスルー。ちょっと拗ねたような顔をしたが、今はそれどころではない。

「キャラルさん」

「何よ？」

「一つだけ聞きたいことがあるんですよ」

「だから何よ？それとなんで敬語なの？」

またしてもキャラルの発言はスルー。少し拗ねたような顔をしてい

る。……かわいいな。

………落ち着け！落ち着くんだ僕！ゲーム内キャラだから！
！現実には下手したら男かもしれないんだから！

「で、聞きたいことって？」

僕が中々要件を言わない為、痺れを切らしたキャラルが先を促してくる。

まだ少し関係ないことで動揺していたが、これ以上待たせると面倒なことになる予感がするのでさっさと聞くことにする。

「いや、なんかさ」

「うん」

「日本語が流暢になってない？」

そう。キャラルが接続する前は単語だったり片言だったりしたのだが、今は至って普通に日本語で話しをしているのだ。僕としては夏休み中ずっと片言だったりしたので凄い違和感があるのだ。

「ああ、そんなことか」

「結構重要だと思っただけどな……」

「そう？」

「うん」

「まあいいじゃない。それより、私の日本語が流暢になった理由だけど」

「うん」

「私が翻訳機を使わずに日本語入力してるからだと思っわ」

「そんなことできたんだ」

「ええ。それに私、今日本にいるから」

「そうなんだ。日本にねえ」

「そうそう」

.....。

「キャロルさん」

「どうしたの？」

「僕の聞き間違いかもしれないから確認するんだけど」

「うん」

「なんか、日本にいますかって聞こえたんですが」

「聞き間違いなんかじゃないわよ」

キャロルはそこで一回切ると、聞き分けのない子供に言い聞かすような優しい笑顔を向けて僕に告げた。

「私は今、日本に来ているの」

驚きのあまり画面を凝視している僕は、さぞかし面白い表情になっていたことだろう。

再会（後書き）

登場人物が片っぱしから暴走していくんだが、どうしたらいいのしょう……。

おかげでイベントが進まな（ry

感想・評価・誤字・脱字等あればお願いします。

相方がいない時

「——っという学校知ってる？」

停止から戻ると同時に色々質問していたのだが、キャロルという呼び名からウチの学校に来た転校生を思い出した。そして自分のことをキャロルと名乗っていたのでもしかしたらと思ったのだ。

「知らないわ」

ちよつとそっけないがあまりにも早い即答だったので、本当に知らないのだろう。

「そつか。僕と同じクラスに転校生が来たからもしかしたらと思ったけど」

「え！？同じクラス！？」

「うん。凄い偶然だよね」

「……そうね」

「美人だし性格もいいから、いつも周りに人がいるみたいだよ」

「みたいって……」

「いや、僕、なんだかんだで話をしたことないんだよね」

「……同じクラスなのに？」

「うん」

「……薄情じゃない？」

キャロルが顔をしかめてそんなことを言ってくる。

「と言われてもね。いつも誰かしらと話てるから絡みにくいんだよね」

「そうかもしれないけど……」

「まあ機会があつたら話くらいするよ。残念ながらないと思うけど」
「機会つて、例えば？」

「ありえないけど、向こうから話かけてくるとか？」

「ありえないんだ……」

「うん。だって僕は自慢できることなんか全くないからね」

「それもどうなの？」

「仕方ないよ。事実だし」

自慢（？）出来ることといえば、せいぜい両極端な兄妹との腐れ縁が続いていることくらいだろう。そして絶対に言えないが、その妹と中学１年まで一緒に風呂に入っていたことだろうか。その兄妹の家族と、我が家の家族には、『この事を人に告げたら自決する』と真剣な表情で口止めしてあるから大丈夫だろう。入浴時にはもつと人に言えないようなやりとりがあつたのだが、これは断固として墓に持っていくと決めてある。妹の方にもこれを誰かに言ったら二度と会えなくなると散々脅し……説得してあるので大丈夫だと思いたい。

若かった！あの頃は若かつたんだよ！！

「コウ？どうしたの急に真っ白になったけど」

「大丈夫。なんでもないよ」

「目が死んでるわよ？」

「あははは……。ただ……無知は罪だと、噛み締めていたんだ」

「突然どうしたの！？キャラが違うわよ！？」

「本当に大丈夫だよ。軽く死にたくなっただけだから……」

「どこが大丈夫なの！？全然大丈夫そうじゃないんだけど！？」

「大丈夫だよ。昔の自分に会えたらまず間違いなくスプラッタ映画も真っ青の現場が出来上がるだけだからさ」

「全然大丈夫じゃないよね！？」

「あははは。キャラルは面白いなあ」

「私！？おかしいの私なの！？」

キャラルをからかい、黒歴史を思い出して下がったテンションの回復に成功する。キャラルは若干振りきれたようだが、まあ高い分には問題ないだろう。

「さて、キャラルがおかしいのは置いておくとして」

「おかしいって断定された！しかも置いておかれた！！」

「今日はどこに行ってみようか？」

「……問い詰めたいところだけど、日付が変わりそうだからいいわ」「どこか行きたいところとかってある？僕としては、そろそろ装備関連のクエストで装備を新調したんだけど」

「それでいいわ。私もそろそろ装備を変えたいしね」

「わかった。じゃあどのクエストにするかなんだけど……」

「そうね。同じ場所で私たち2人とも出来るクエストがいいかな？」

「そうだね。となるとだいぶ限られてくる訳だけど」

「それに2人で行ける範囲であることね」

「組めるようなら他の人と組んでもいいよ？」

「駄目ね。私たちって、コウが思っているよりPSが高いのよ？他の人がいても足手まといでしかないわよ」

「そうなの？皆こんなもんだと思ってたんだけど」

「一度組んでみればわかるわ。……うんざりするわよ」

「そうなんだ……」

「そんな大振り耐えようとせずに避けなさいよ！とか、なんで今のところで反撃しないの！？とかね。普段と段違いで忙しかったわ。ポーションの消費が会得アイテムより上回ったのもあの時が初めてだったわ」

「ポーションなんて早々使うもんじゃなくない？」

「垂れ流し状態だったわよ。コウとなら5分の1で済むのに……」

「たまたま下手な人と当たっただけじゃないの？」

「いいえ。コウがいないときは別キャラでいろんな人と組んだけど、だいたいの人がそういう感じだったわ。消費が凄くて、最終的に一人で落ち着いたくらいよ」

「そうなんだ。僕はキャラルいないときはずっと一人だしなあ」

「コウは私以外の人と組んだことないの？」

「ないよ」

「……これはオンラインゲームよ？」

「言われなくてもわかってるよ？」

「他の人と組むのがオンラインゲームの醍醐味じゃない？」

「そうだね。だからキャラルと組んでるんだよ。僕はキャラルがいればいいから」

「……」

「キャラル？どうかしたの？」

「……なんでもない」

「そう？なんか怒ってるみたいに見えるんだけど」

「気のせいよ！」

何やら不機嫌になった(?)キャラルが「準備してくる！」と告げて走っていくのを眺めながら、さっきキャラルが言っていた台詞を思い返していた。

「僕がいないときは、か」

自意識過剰化もしれないが、キャラルも僕と遊ぶのを特別に感じてくれていると思うと、とても嬉しくなった。

ちなみにこの後、キャラルの絶叫が響き渡るのだが、これについては想像した通りだと思うので割愛します。

相方がいない時（後書き）

なんで絶叫したかだって？それは特大級の黒い悪魔を見たからさ！！

皆様の感想・評価が作者の力になります。誤字・脱字あれば教えてください。

最後に、更新不定・1話が短い私の作品ですが、今後もしっかりお願いします。

日常的な問題（前書き）

また1月超えてしまい、申し訳ないです……。

日常的な問題

「……コウ」

「……何かな？」

「……なんでもないわ」

「途中で止められると気になるんだけど？」

「……」

「……」

「……」

「……」

沈黙をやぶるようにキャロルが溜息を吐く。そしてこちらと目線を合わせないまま、聞こえるか聞こえないかという小声で呟く。

「……コウと一緒にいると、飽きなくていいわ」

「それは、どういう意味かな？」

「……どういう意味だと思う？」

「質問を質問で返さないで欲しいかな？」

「細かいことを気にすると異性に好かれないわよ？」

「……」

「……」

「……キャロルさん」

「何？コウ」

「つまりあなたは僕のせいだと言いたいんですか？」

「……そんなつもりはないわよ？」

「本当に？」

「ええ。ただ、コウといるときは他の人といるときに比べて色々起こるなと思っただけよ」

「……」

「……」

「……キャロルさん」

「何？コウ」

「それは言外に僕のせいだと言っているように聞こえるんですよ？」

「気のせいよ。そういう被害妄想はどうかと思っわ」

「……そうですか」

「ええ」

「……」

「……」

「……キャロルさん」

「何？コウ」

「普通はこんなにイベント問題が立て続けに起こったりしないんでしょ
うか？」

「そうね。普通は起こらないわね」

「……」

「……」

なんで僕は相方から無言のプレッシャーを感じなければいけないの
だろう。僕にはなんの責任もない。……はず、なのに。
どうしてこうなったのか……。キャロルが冒険の準備を始めて、例
の黒光りした物体Xに遭遇したあたりまで遡ってみる。

例の黒い核兵器を目の当たりにしたキャロルが絶叫した。すでに僕
の中ではお約束認定されている。

準備に必要なアイテムは購入できたのだが、問題は目に見えてキャ
ロルの機嫌が悪くなったことだろう。

移動中は僕が話かけてもそっけない返事しかくれず、道中ずっと眉
間にシワを寄せて仏頂面をしているのだ。さすがに戦闘行為に支障

が出るようなことはなかったが……。

「やっと半分くらいかな？」

「そうね」

「そういえば、さっきの敵は強かったね」

「そうね」

「これからもっと強いの出るんだよねー」

「そうね」

「たどり着けるかな？」

「そうね」

「……キャロルさん」

「そうね」

「……」

先ほどからずっとこれである。街を出てから『そうね』以外の言葉を聞いてない……。いい加減……。泣いてもいいよね……。

「コウ」

「何かな!？」

「さっきからうるさい」

「……」

久しぶりに『そうね』以外の言葉を聞いたと思ったらこれだよ!!
今ここで僕が泣いたとて責められる人はいないはずである。いや、
いない!!

「コウ」

「……なんでしょう?」

「鬱陶しい」

「いくらなんでもそれは酷いよ!!」

「うるさい」
「……はい」

情けないって？言われなくてもわかってるよ……。でも、仕方ない
だろ！！今のキャラルはとてつもなく怖いんだよ！！

「……コウ」
「……何かな？」

剣呑な表情はそのままに、キャラルの雰囲気が変わる。視線は正面
を向いたまま、足を止め得物を構えている。

「……どうする？」
「どうしようか……」
「こんなところにドラゴンが湧くなんて聞いたことない」
「僕も聞いたことないな」
「……プレイヤーかしら」
「そうだろうね。こんなところに上級モンスターが湧くわけないし」
「勝てる？」
「……かなり厳しいと思う。相手がド素人なら勝てるかなって程度」
「逃げるわよ」
「了解」
「大きく迂回して行きましょう」
「それなら西から行こう。敵の遭遇率や平均レベルが低い」
「わかった」

さすがに上級モンスター相手に無策で突っ込める勇者様^{バカ}ではないの
で、僕もキャラルも尻尾を巻いて逃げ出す。
こんな状況になればさすがのキャラルでも僕で遊ぶのを続ける余裕
はないようだ。こんな状況じゃなくても僕をからかって遊ぶのはや

めて欲しいのだけでも……。

……僕が乗るからいけないんだらうか？

「コウ！考え事してる場合じゃない！！」

「それもそうだ。全力で振り切ろう」

思考を切り替えると、目の前の敵から逃げ切ることだけを考える。
現在の場所は森の奥深くなので、生えている木々を盾にしながら全力で駆け抜ける。相手は結構な図体なので、こちらを追いかけるのは難しいだろうと思う。

「コウ！！」

「そうくるのか」

急に薄暗くなったかと思えば、自分達の頭上に先ほどのドラゴンが飛んでいる。どうやらこの木々の中を走って追いかけてくるほど愚かではないらしい。非常に残念だ。

「どうしようか？」

走りながらも頭上を飛んでいるドラゴンから注意を逸らさない。逸らせば一瞬でお陀仏だろう。

「デスペナは嫌だなあ」

「余裕あるわねコウ……」

「いや、余裕はないよ？ただ、半ば諦めているというか……」

「あ？」

「いえ、なんでもありません！！」

怖かった！今のキャロル怖かったよ！！

隣を走っているキャロルの方が頭上を飛んでいるドラゴンよりよっぽど怖かった。

「このままだと戦闘せずには終われそうにないな……」

僕がそう呟いた時、頭上を飛んでいたドラゴンが口を開いた。おもむろに深呼吸をするような動作をすると、その口内に赤色の発光が見え始める。何かが開かれた口内に集束していく。開かれた口から見え隠れする牙が陽炎のように揺らめいている。徐々に陽炎の範囲が広がっていく。そして溜めが終わったのか、吸い込む動作が一時的に止まる。

「っ！……不味い！！」

「きゃっ！コウ！？」

僕は咄嗟にキャロルを抱えると、丁度よく目の前に現れた段差部分に飛び込む。飛びこむのと同時にドラゴンから灼熱のブレスが放たれた。灼熱のブレスは木々を薙ぎ倒し僕らに迫る。ブレスは僕らに当たらず、頭上スレスレを通り過ぎて行く。どうやら段差に飛び込んだおかげで、ドラゴンがブレスの直前で僕らを見失ったようだ。周囲に生えていた鬱蒼と生い茂る木々も味方してくれた。

「危機一髪にも程があるね……」

「……」

その場でドラゴンの様子を窺う。頭上を旋回しているが下りてくる様子はなく、追撃が来る気配もない。どうやら僕らを完全に見失ったようだ。しばらく旋回して獲物^{僕ら}を探していたが、そのうち諦めたのかどこかへ飛んでいく。

「はあ……。寿命が5年は縮んだよ……」

何故5年かって？なんとなくだよ！！

「キャロル。大丈夫？」

「……ええ、大丈夫よ」

「キャロル？顔が赤いけど、本当に大丈夫？」

先ほどのプレスは直撃は避けられたはずなのだが、余波があるらしく、僕のライフゲージもだいぶ持っていかれていた。直撃したら即死だっただろう。キャロルも僕が壁になったのだが、半分近く持つて行かれたようだ。

「大丈夫よ。ちょっと暑かっただけ。というかい加減どいて欲しいんだけど？」

「あ、ごめん」

謝罪すると共に手を引いて立ち上がらせる。

「全く、とんだ災難だったわ」

「本当にね……」

「……どっかの誰かさんは変なところ触るし」

「あれ？キャロルまた顔が赤くなってるよ？」

「なんでもない！！」

こちらに向かって舌を出すとそっぽを向いてしまふ。

段差に飛び込む直前にキャロルを抱えた上げた際、胸を鷲掴みにしていたのは忘れることにする。着痩せするタイプだったんだな。などとは口が裂けても言えない。その発言は俗に言う死亡フラグである。

「さて、ドラゴンもどっか行っただしさつさで行きましょう」

「そうだね。余計な時間も食ったことだし」

まだ顔が赤いがこれ以上からかうと鉄拳制裁が飛んでくるので自重する。地図を開き目的地の道のりだけ確認すると、ペースを少し上げて歩き始める。目的地まで、もう何事も起こらないことを祈る。

日常的な問題（後書き）

誤字脱字・感想・評価等をいただけると嬉しいです。
もれなく私の活力になります。よろしくお願いします。

盗賊（前書き）

えー…… かもしれませんが半年近い間を開けてしまいました……。 本当に
申し訳ありません……。

未だに見捨てないでいてくださる方々、本当にありがとうございます。
す。

最後まで書くつもりではいるので、本当に申し訳ないですが気長に
お待ちください……。

盗賊

こんな森の中でもちよつと視線を彷徨わせたら……。ほら。可憐な花や可愛らしい小動物が視界に入る。物騒な場所でも周囲を見渡せばいろんな発見がある。心に余裕を持つのは大切なことだね。

「現実逃避してる場合？」

こちらを非難するような目で、苛立ちを含ませた声が僕の耳に届く。

「だつてねえ？」

そう言いながら正面に視線を移す。……厳つい顔したおっさんの集団が物騒な獲物を手に持ち、徐々にこちらへの包囲網を狭めている。しっかりと先ほどより近くなっているおっさんの顔を確認する。

「……ねえ？」

「そんな泣きそうな顔しても現実是不変わらないわよ」

僕の態度を見てさらに苛立ちを募らせたらしいキャロルが、厳しい口調で現実を突き付けてくる。

「はあ……。どうしようか？」

「どうするもこうするも突破するしかないじゃない」

「……ですよねえ」

嫌々、本当に嫌々だが仕方なく武器を構える。山賊は一人一人の戦力は大きかったことがない。それどころか非常に弱い。数も多くて5

0程度だ。動きもさほど早くない上に攻撃は大振りになる。しかし、気をつけなければならぬのは連中の持っている武器でいつもこいつも必ず毒・麻痺・睡眠といった状態異常が付与されている。これが非常に厄介で、油断していると熟練者と言われる人ですらライフをあらかた持つていかれるような代物なのだ。

「まったく！めんどくさいわね！！」

「……周囲はすでに罠だらけなんだろうなあ」

「まあ、そうでしょうね」

さらに厄介なことに、人間型の敵は罠を設置してくる。しかも盗賊団によって罠の精度が完全に別物になるため、かなり注意しないといけない。わかりやすい落とし穴を飛び越えたら、その先に精巧に作られた剣山付きの落とし穴が待ち構えていることだってあるのだ。本当にわかりやすい罠だけの盗賊団もあるが……。

とにかく、出会った直後にわかる訳ではないので即撤退がしにくい。『逃げた先には罠のオンパレードでした』では間違いなく全滅する。

「正面突破が一番安全とか……」

「そういう敵なんだからしょうがないでしょう」

溜息を吐きながら獲物を構える。背後に敵が配置されていないことから罠の山でもあるのだろう。

「特攻してくる。サポートよろしく」

「後はまかせなさい」

頼もしい言葉を聞くと同時に、正面の盗賊に突撃する。居合で切り伏せると血のエフェクトと共に地面に倒れて行く。その光景を最

後まで見届けず、近くにいた盗賊に切りかかる。その盗賊は咄嗟に防御の姿勢を取るが、お粗末なうえに遅かった。防御態勢を取られる前に上段からの袈裟切りで2人目を倒す。

「掠るのも死活問題とかつ！」

背後に近づいた盗賊を、振り向きざま横一閃で蹴散らす。僕の脇を抜け、キャロルの方へ行こうとした者を背後から切り捨て、バクッステップで背後にいた盗賊の懷に潜り込むと鳩尾へ肘を叩き込む。

「キャロル！ ボスを探して！」

「さっきから探してるわよ！」

キャロルの方へ敵が流れないように立ち回りながら、視線を巡らせボスらしき盗賊を探す。

「それっぽいのではない！？」

「私が探すからコウは目の前の敵に集中しなさい！」

「はい！」

とは言ったが蹴散らしながらも探すのはやめない。

「……おかしい」

いくら探してもそれらしき盗賊が見当たらない。盗賊には必ずボスがあり、そいつを倒すと盗賊団は撤退していく。正面から戦うときは、できるだけ早くボスを見つけて倒すのが重要になってくる。普通は視界に必ず入る位置に居るのだが……。

「……どこだ」

嫌な予感がする。

「背後にも気を付けて！」

「言われなくても探してるわよ！」

いくら力量差があっても物量が違い過ぎる為、キャラルの方へも少なからず敵が流れてしまう。まあ職が職だが、こんな雑魚に後れを取ることはない程度には強いのでその点は心配していない。しかし、ボスになると他の雑魚とは違い、多少できるようになるため、キャラルには少し荷が重い。だからボスだけは早々に見つけて僕が蹴散らすことになっている。

いくら探しても視界に映らないことに、嫌な予感が膨れ上がっていく。一番近くにいる盗賊の首を刎ね、キャラルの状態を確認する。自分で思っていた以上に距離が離れていた。そして、キャラルの頭上、木の枝にボスが得物を振り上げている姿が見えた。

「っ！！」

目の前から襲ってくる盗賊を無視し、キャラルとの距離を一足飛びに縮めていく。視界の端で膝を曲げ、飛び降りる体勢になってボスがいる。

「キャラル！ 上だ！！」

「え？」

僕の声が届いたようだが、キャラルの周囲にはまだ数人の盗賊がいる。上を確認していられる余裕はないようだった。だが、僕の焦った様子から察したのだろう、僕側にいる盗賊を倒しにかかる。

視界の端ではボスの足と、木が離れていた。急速に縮まっていく

キャロルとボスの距離。目の前で背を向けて突っ立っている盗賊を切る。生死も確認せずその脇をすり抜ける。さらにもう一人切り伏せた時点で、ボスの影がキャロルに重なった。

「はぁあああ！！！！」

咄嗟に、目の前にいる盗賊をキャロルに向かって思い切り蹴り飛ばす。

「うええ！！？」

キャロルから何とも言えない悲鳴らしきものが聞こえ、僕の蹴り飛ばした盗賊と纏れるように吹っ飛んでいく。直後、キャロルの居た位置にボスが武器を振りおろした。ボスの一撃が地面を抉り、土を巻き上げる。

ボスの視線が直前まで狙っていた獲物の方へ流れた。僕はそこでようやくボスの元へ辿り着き、そのまま、僕から視線をはずしているボスの首を刎ねた。

「……はぁ」

僕は撤退していく盗賊団を見ながら溜息を吐く。ボスが倒されたことで散り散りに逃げていく盗賊たち。それを見送りながらキャロルの方を見る。

「うっ！！」

そこには、僕が蹴り飛ばした盗賊に、組み伏せられるように倒れているキャロルがいた。さらに言うなれば、目元が吊り上っており、無言で、僕を射殺さんばかりに睨みつけている。ついでに、ドラゴンがかわいらしく見えるほどの殺気も一緒に……。

地雷

森の中を無言で歩く。別に話がしたくないとか、索敵中という訳でもない。ただ、先の盗賊団討伐から目に見えてキャラルの機嫌が悪いというだけだ。

最初の内は腰が引けながらも話しかけてはいたのだ。でも話かけるたび、ワイバーン程度なら逃げ出しそうな鋭い視線と、いつもなら高くてかわいらしい感じの声が、地獄の底から響いてきてるとい
うか、ドラゴンの咆哮を彷彿とさせる、どっから出してるのかわからないほど低い声なのだ。すぐに心が折れましたね。

ヘタレ？チキン？好きに呼んでくれ……。怒らせた女性キャラルほど怖いものは存在しないのだ。

今ほど茜の天然をうらやましく思ったことはない。天然だつたらそのままなんとなくで乗りきれのにつ……。！しかし、無い物ねだりしていても現状は好転しない。早急に何とかしなければ僕の胃がやられかねない……。

さっきの盗賊団の方がまだ難易度が低かったような気さえする……。

「あの、キャラル……」

「あ？」

怖い。とんでもなく怖い。今絶対に『あ』に濁点入ってましたよ！？今のキャラルの眼力ならそのらの不良は逃げ出すんじゃないかなろうか……。

僕なら財布を持てたら差し出していたかもしれない。『どうか命だけはっ！』とか言いながら土下座していたかもしれない。というかする。

「いい加減機嫌を直してはいただけないでしょうか？」
「……………」

隊長！無言で睨まれているであります！！最終奥義、戦略的撤退
は……。駄目だ！それをしてたら人生が終わる！考える僕！生き残る
為にっ！！

「……………」

おかしい……。無条件降伏しか選択肢がない……。

……………いつも通りか。あれ？おかしいな。目から汗が止まらないよ
……………。

キャロルに見えない位置で財布を確認する。何をするって、謝り
倒して物で釣りますが……何か問題でも？

「今日の収穫と合わせれば……。いける！」

事実上の敗北宣言だが、気にしたら負けだろう。いや、もう負け
てるし、一度たりとも勝ててないからいいか。自分で言ってる泣き
そうだよパ。ラッシュ……………。

「……………コウ」

「なんだいキャロル？」

先ほどまで話しかけても完全無視だったキャロルが声をかけてく
る。ちよっと、いや、かなり嬉しい。だって沈黙が痛かったんだけ
よ！！

「いえ、違うわね。駄目男ね。この駄目男」

「なんで！？なんで僕は罵倒されてるの！？」

前言撤回。これなら沈黙の方がまだ良かった。突き刺さる視線も先ほどより剣呑なものに変わっている。なんでだ……。

「僕なんかした!？」

「ふう……」

そんな、『こいつ本当にわかってないのかよ』的な視線はやめて傷つくから! 僕の繊細な心が地味に傷つくから!

「それはね。駄目男」

「固定!？ その蔑称はもう固定なの!？」

「黙りなさい。話が続かないでしょう。駄目男」

「嫌だよ!! ここで黙ったらその蔑称で話が続いちゃうじゃない!!」

「いい? ちゃんと話を聞くのよ? 駄目男」

「話を聞いている場合じゃないよ! その駄目男って言うのやめてよ! しかも毎回必ず最後に付けるし!!」

「駄目男が駄目な理由をあげ始めたら本来限りがないんだけど……」

「僕の言葉は完全に無視!？ しかも駄目な理由限りがないってかなり傷つくんですけど!!」

「とりあえずそこに正座しなさい。話はそれからよ。駄目男」

「こんなところで!？ そろそろ僕マジ泣きしそうなんだけど!!」

「本当はこんなこと言いたくないんだけど……。あなたの今後の為に教えておいてあげるわ。感謝しなさい。駄目男」

「それ本当に僕の為!？ キャロルさん自分の口元に笑みが浮かんでるの気付いてます!？ 凄く楽しそうなんですけど気付いてます!？」

「ええ、だいぶ楽しくなってきたわよ。駄目男」

「認めるの!？ その事実に対して僕はどうしたらいいのかわから

ないよ!!」

「いい？ 駄目男が駄目なところは、人の機嫌を直すのに物でどうにかしようとしたところよ」

「流された！ しかも指摘されたところを否定できない!!」

キャラルがお説教モードに入る。左手を腰に当て、右手は人差し指を立てて顔の前に置く。ちなみに僕はすでに正座している。ここではあまり関係がないが、お説教モードのキャラルはその容姿も相まってかなり可愛い。少し背伸びしているような雰囲気がありとても和む。和んでいる場合ではないんだけど。

「私が可愛いなんて当たり前でしょう。それよりちゃんと私の話を聞きなさい」

「いや、確かに考えていたけれども！ なんで僕の考えてることがわかったの！？ そしてその自信はどこから来るの!？」

「駄目男の顔に全て書いてあったわよ。それに可愛いのは当たり前でしょう。そういうふうにキャラメイキングしたんだから。」

「僕そんなにわかりやすいの!？ キャラメイキング……確かにそうんだけど、確かにそうんだけど何か納得できないものがっ!」「うるさいわよ。駄目男。……ところで、だいぶ前から思っていたんだけど、私が少し機嫌悪くなるたび物でなんとかしようとするのはどうして?」

「どうして、と言われてもですな……」

前から思ってたのか……。というか僕、キャラルの記憶に残るほどやってたかな?——うん。結構な回数やってるな。どうしてと言われると、そうだな。

「ええと、前に話したことあるよね？ 幼馴染の女の子なんだけど

……」

「……ええ、中学に入るまで一緒にお風呂に入っていたっていう女の子ね」

……なんだろう。踏んではいけない地雷を踏んだような気がする。キャロル、顔は笑ってるのに、目が全く笑ってない……。

「出来ればその黒歴史は忘れて欲しいのですが……」

「いいから早く続きを話さない。それで、そのとっても仲のいい幼馴染の女の子が、何？」

おかしいな。顔は笑ってるのに、言葉の一つ一つに棘があるような気がする。本能が、今は絶対に逆らっちゃ駄目だと警報を打ち鳴らしてる。

「そのですね。その幼馴染が機嫌を損ねると、必ず何か物を買ってくれとせがむので、それが癖になっているんじゃないかなあ」と
「……へえ」

ああ、怖い。今のキャロルは本当に怖い。全身から何か黒いオーラが立ち上っているような気がする。顔だけは笑っているのが余計に恐怖を誘う。

想像してみたい。僕は今、地雷原の真ただ中で、一歩間違えたら吹き飛ばような場所にしていると。僕としては、最新の注意を払ったつもりだったんだけど、地雷についてなんの知識もない僕に地雷の有無などわかる訳がなく……。

まあ、要するに何が言いたいかというと、確実に踏んだよね。地雷。

「駄目男。駄目男に話しておかなければいけないことがあるわ」
「……ハイ」

生きて、帰れたらいいな……。

地雷（後書き）

感想・誤字・脱字あればお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1390i/>

E A R T H

2011年2月15日20時23分発行